

# 原 遺 跡 19

– 第32次・28次調査報告 –

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1236集

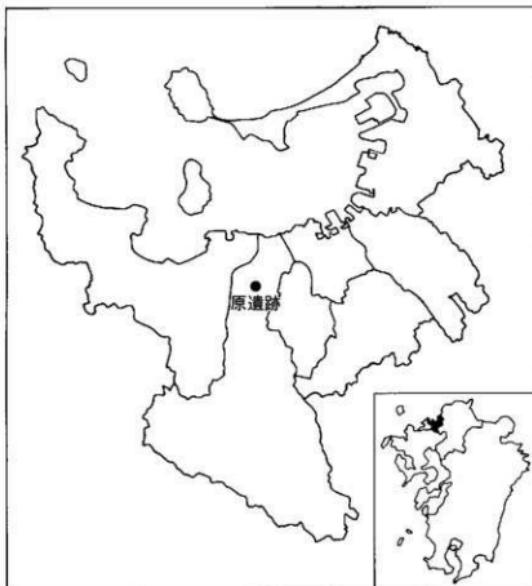
2014

福岡市教育委員会

# 原遺跡19

- 第32次・28次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1236集



遺跡番号 HAA-2B-32  
調査番号 1126・1226

2014

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くからさまざまな地域との文化交流を通じて発展を遂げてきました。市内各地には先人たちの築いてきた数多くの歴史的遺産があります。それらを保護し、後世へと伝えていくことはわれわれの義務であります。また本市は、目指す都市像のひとつとして「海に育まれた歴史と文化の魅力が人をひきつける都市」を掲げ、文化財の保存と活用にも力を入れています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な文化財が失われていることも事実です。本市では開発によりやむを得ず破壊されていく遺跡の記録保存を行い、広く公開・活用するよう努めています。

本書は、都市計画道路長尾橋本線建設に伴い平成23・24年度に調査を実施した原遺跡第28次および第32次調査の成果を報告するものです。

第28次調査では弥生時代および中近世の集落遺構を確認しました。特に古代末から中世にかけては多くの貿易陶磁や土師器が出土し、11世紀後半から12世紀にかけての拠点集落が存在した可能性が出てきました。

また、第32次調査においては中世から近世の遺物・遺構が検出され、当時の集落の様相の一部を確認することができました。さらに弥生時代の土坑から出土した遺物は、早良平野の弥生時代の歴史を解明するうえで貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました関係者の方々に、心から謝意を表します。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

## 例　言

- 本書は福岡市教育委員会が都市計画道路長尾橋本線建設に伴い、福岡市早良区原6丁目地内において平成23・24年度に発掘調査を実施した原遺跡第28次・32次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、令達事業として実施した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構および遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の製図は屋山洋・福菌美由紀・濱石正子が行った。
- 本書で用いた方位は、すべて磁北を示す。
- 本書に掲載した国土地理院基盤地図は、世界測地系によるものである。
- 遺構の呼称は、井戸をSE、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、池状遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
- 遺物の番号はそれぞれの調査次数での通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書で記述する陶磁器の分類については、次の文献を参考とした。  
『太宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -』 太宰府市教育委員会 2000年
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆は屋山・福菌が、編集は福菌が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	28次	調査略号	HAA-28
調査番号	1126	分布地図図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請地面積	4,455m <sup>2</sup>	調査対象面積	1,150m <sup>2</sup>	調査面積	628m <sup>2</sup>
調査地	福岡市早良区原6丁目868-1、869-1、870-1		事前審査番号	21-2-225	
調査期間	平成23（2011）年9月20日～平成24（2012）年3月7日				

遺跡名	原遺跡	調査次数	32次	調査略号	HAA-32
調査番号	1226	分布地図図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請地面積	4,455m <sup>2</sup>	調査対象面積	600m <sup>2</sup>	調査面積	382m <sup>2</sup>
調査地	福岡市早良区原6丁目873-1外		事前審査番号	21-1-225	
調査期間	平成24（2012）年11月7日～平成25（2013）年3月5日				

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 第32次調査の記録	
1. 概要	5
2. I区の調査	
1) 溝 (SD)	6
2) 土坑 (SK)	10
3) その他の遺構	10
3. II区の調査	
1) 掘立柱建物 (SB)	11
2) 溝 (SD)	11
3) 井戸 (SE)	14
4) 土坑 (SK)	21
4. 結語	24
IV. 第28次調査の記録（近世編）	
1. 概要	35
1) 28次調査弥生時代～古代の遺構	35
2) 近世遺構について	35
2. I区の調査	35
1) 溝 (SD)	35
2) 土坑 (SK)	38
3. II区の調査	39
1) 井戸 (SE)	39
2) 溝 (SD)	39
3) 池状遺構 (SX)	43
4. その他の出土遺物	45
5. 結語	48

## 挿図目次

第1図 原遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)	3	第8図 II区遺構配置図 (1/100)	12
第2図 原遺跡調査区位置図 (1/6,000)	4	第9図 SB161実測図 (1/60)	13
第3図 第32次調査区位置図 (1/1,000)	5	第10図 SD085実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3,1/4)	15
第4図 I区遺構配置図 (1/150)	7	第11図 SD070実測図 (1/40) およびSD085・070出土 遺物実測図 (1/1,1/3,1/4)	16
第5図 SD001実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2,1/3)	8	第12図 SD120実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3,1/4)	17
第6図 SD001出土遺物実測図 (1/3,1/4)	9	第13図 SD120出土遺物実測図 (1/3)	18
第7図 SD022・SK040実測図 (1/20,1/40) および出土 遺物実測図 (1/3)	10		

第14図	SD120出土遺物実測図 (1/1.1/3.1/4) .....	19	第23図	近世遺構出土遺物実測図 (1/3) .....	38
第15図	SE121実測図 (1/40) および上層出土遺物実測図 (1/1.1/3.1/4) .....	20	第24図	SK002遺構実測図 (1/40) .....	38
第16図	SE121下層出土遺物実測図 (1/3) .....	21	第25図	II区全体図 (1/150) .....	40
第17図	SK084実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3) .....	22	第26図	SE286遺構・遺物実測図 (1/40.1/4) .....	41
第18図	SK084出土遺物実測図 (1/1.1/3) .....	23	第27図	SD202・276実測図 (1/40.1/30) .....	42
第19図	原遺跡出土弥生時代前期土器① .....	25	第28図	SX263実測図 (1/80) .....	44
第20図	原遺跡出土弥生時代前期土器② .....	26	第29図	SX263出土遺物実測図 (1/3) .....	45
第21図	12次・28次I区近世遺構分布図 .....	36	第30図	SX263石組み遺構実測図 (1/20) .....	46
第22図	I区全体図 (1/100) .....	37	第31図	その他出土遺物実測図1 (1/3) .....	47
			第32図	その他出土遺物実測図2 (2/3.1/1) .....	48

### 表 目 次

第1表	原遺跡発掘調査一覧 .....	4	第4表	28次遺構一覧3 .....	51
第2表	28次遺構一覧1 .....	49	第5表	28次遺構一覧4 .....	52
第3表	28次遺構一覧2 .....	50			

### 図 版 目 次

図版1	1. I区南側全景 (北から) 2. I区北側全景 (東から) 3. SD022土層 (北から) 4. SK040 (南から)		図版10	1. II区全景 (東から) 2. SE286 (南から) 3. SD202 (北から) 4. SD202土層 (北から) 5. 263・274・275土層 (南から) 6. 263・274・275土層 (南西から) 7. SK263疊出土状況 (北から) 8. SD202・SK263 (北から)
図版2	1. I区西側全景 (東から) 2. SD001 (南から) 3. SD001土層 (南から) 4. 道路状遺構 (南から) 5. SK059 (東から)		図版11	1. SK263・264・275 (北から) 2. SK263・264・275完掘 (北から) 3. SK263中央ベルト土層 (南から) 4. SK263東壁土層 (西から) 5. SK263・264・275 (西から)
図版3	1. II区東側全景 (西から) 2. SB161 (西から) 3. SD070 (南から) 4. SK084土層 (北から) 5. SK084完掘 (北東から)		図版12	1. 202・263・274・275 (西から) 2. SK263石組み (西から) 3. SK263石組み (南から) 4. SK263石組み・木杭 (西から) 5. SK263石組み・木杭 (北から) 6. SK276 (南西から) 7. SK263木杭 (北から) 8. SK263木杭打込み状況 (東から)
図版4	1. II区西側全景 (西から) 2. SD120 (西から) 3. SD120土層 (南から) 4. SE121土層 (北から) 5. SE121 (北から)			
図版5	出土遺物(1)			
図版6	出土遺物(2)			
図版7	出土遺物(3)			
図版8	出土遺物(4)			
図版9	1. SD001土層 (北から) 2. SD001 (北から) 3. SD001遺物出土状況 4. SK002 (西から) 5. SK002土層 (北から)			

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成22年3月17日付けで、福岡市道路下水道局道路整備部西部道路整備課（現 建設部西部道路課）より福岡市教育委員会に対し、福岡市早良区飯倉4丁目～原8丁目地内における都市計画道路長尾橋本線外1線（飯倉工区）建設に伴う埋蔵文化財の事前調査依頼が提出された（事前審査番号：21-1-225）。

これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課（現 埋蔵文化財審査課）は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡および原東遺跡に含まれていることから、平成23年7月6日および平成24年7月4日に工区内の一部において確認調査を実施した。その結果、道路建設予定地（早良区原6丁目地内）の地表下約45cm～180cmにおいて土坑・溝・ピット等を確認した。この成果をもとに両者で協議を行い、遺跡が確認された約1,150m<sup>2</sup>（第28次調査）、と600m<sup>2</sup>（第32次調査）については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、平成25（2013）年1月31日に、第32次調査Ⅱ区西側の追加試掘を行った結果、約80m<sup>2</sup>で遺構が確認されたため、追加で調査を行うこととなった。第28次調査は平成23年9月20日より開始し、平成24年3月7日に終了した。第32次調査は平成24年11月7日より開始し、平成25年3月5日に終了した。

### 2. 調査の組織

調査委託：福岡市道路下水道局建設部西部道路課

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成23・24年度 資料整理：平成24・25年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財第2課  
（現・埋蔵文化財調査課）

課長 田中壽夫（23年度）

課長 宮井善朗（24・25年度）

同課調査第1係長 米倉秀紀（23年度）

常松幹雄（24・25年度）

同課調査第2係長 菅波正人（23・24年度）

榎本義嗣（25年度）

庶務：埋蔵文化財第1課

管理係長 和田安之

（現・埋蔵文化財審査課） 管理係 古賀とも子（23年度）

川村啓子（24・25年度）

調査担当：埋蔵文化財調査第2課

調査第2係

（現・埋蔵文化財調査課） 屋山洋（第28次）

福薗美由紀（第32次）

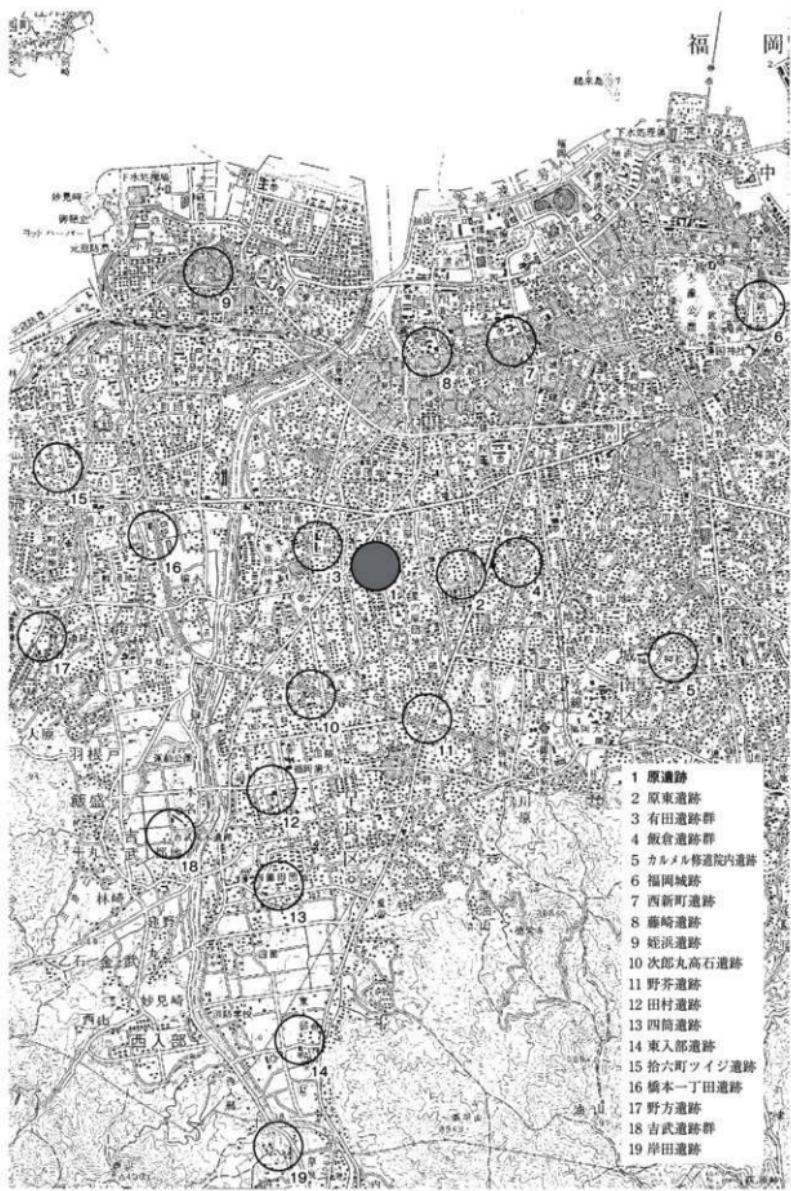
なお教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課は、組織改編のため平成24年4月1日付で経済観光文化局文化財部埋蔵文化財部調査課に移管した。

## II. 遺跡の立地と環境

北に玄界灘を臨み、南に背振・三郡山系がひかる福岡市には、西から今宿、早良、福岡、糟屋の4つの平野が拡がっている。今回報告する原遺跡は、沖積扇状平野である早良平野の中央を流れる室見川中流の東岸に位置し、金屑川と塚塚川に挟まれた標高6~7mの低位段丘上に拡がる遺跡である。周辺には多くの遺跡が存在し（第1図）、これまで数々の調査が行われている。近隣の遺跡としては、油山川を挟んで東側に位置する原東遺跡、金屑川を挟んで西側に八手状に拡がる有田遺跡群がある。原東遺跡では弥生時代前期の環濠や貯蔵穴などの集落遺跡や、弥生時代中期前半から後半の壠塀墓が検出されている。また有田遺跡群には弥生時代初頭の拠点集落が存在し、古墳時代後期から奈良時代にかけては群衆関連施設が設けられ、律令期の政治的な中核となる。続く中世戦国期では、小田部城をはじめとする城館が數か所に認められ、軍事的な側面も帯びるようになる。

本遺跡は、古地図やこれまでの調査成果、現在の水路等から、南北に延びる2つの微高地（微高地A・微高地B）とその間に挟まれた低地で形成されていることが推定される（第2図）。今回調査を行った第28・32次調査は、微高地Aの中央やや東寄りに位置し、微高地の中でも最も高い標高に位置する。

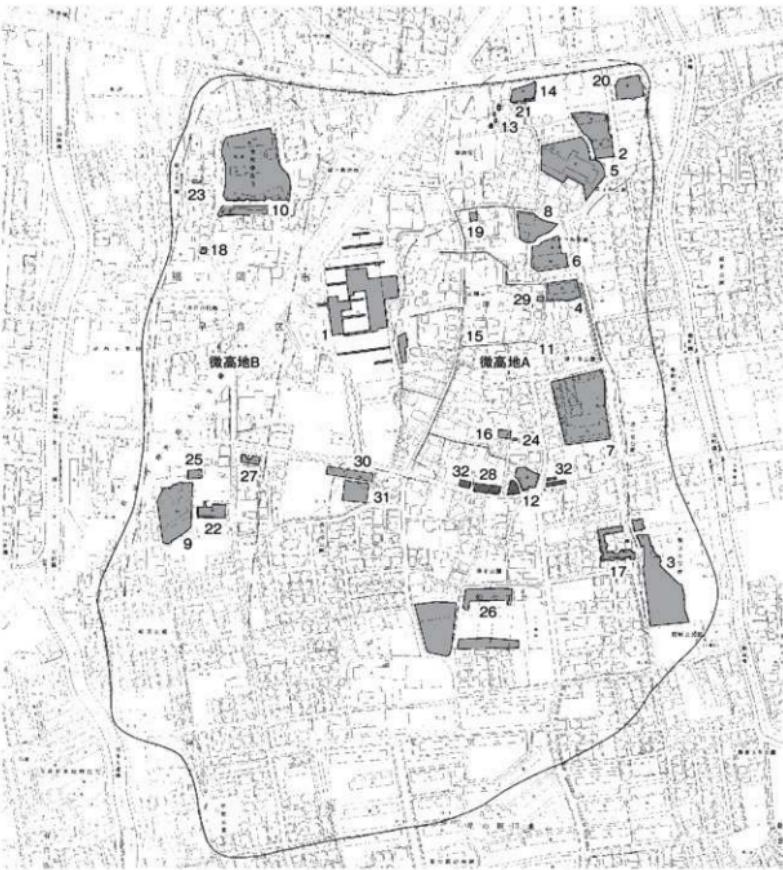
原遺跡では昭和51年の第1次調査以降、これまでに32次の調査が行われ（第2図、第1表）、旧石器時代から中近世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。旧石器・縄文時代の明確な遺構は確認されていないが、剥片石器や石鏃が出土しており、周囲において当該期に人々が活動していた可能性が高い。また、弥生時代から古墳時代前期にかけては、堅穴住居や貯蔵穴などの集落跡や壠塀墓地が見られるようになる。微高地Bの東側、第1次調査では包含層や杭列が見られ、また微高地Aの南端に位置する第3次調査区で多量の遺物が出土しており、台地部周辺の低湿地に広い範囲で初期水田が営まれた可能性がある。さらに第16・26次調査では、弥生前期の住居跡や貯蔵穴が確認され、遺跡の中央から南側にかけての台地の上に集落が形成されていたことがわかる。弥生中期の集落は北端の諏訪宮付近で見つかっており、この付近がひとつの中心であったことが推測されるが、第9次調査では弥生中期ごろの住居跡が、また第10次調査では弥生中期初頭の土坑が見つかっており、生活域がかなりの範囲に広がっていたことが推測される。今回の第32次調査でも、遺構は検出されなかつたものの、弥生中期の遺物が出土しており、今後、周囲に当該期の遺構が確認される可能性がある。古墳時代では、前期を主体に、第3・6・9・22次調査で遺構が分布する。この時期の遺構密度は濃くないが、第3次調査では、自然流路に井堰を設け、灌漑水路を設置することによって可耕地の拡大を図っている。本遺跡内では古代の遺構は少ないが、第10次調査北端で検出された溝は条里の東西方向に一致し、有田遺跡群の溝と繋がる可能性が指摘されている。また、中世前半は、遺跡全域の微高地で掘立柱建物や井戸等で構成される集落が広く分布する。今回の第28次調査で検出された溝からは、多くの貿易陶磁や土師器が出土し、11世紀後半から12世紀にかけての拠点集落が存在した可能性も指摘されている。また、隣接する第32次調査でも、土師器や貿易陶磁、木器が出土する同時期の溝が検出されている。続く、中世後半には第12・16・24次および第9・22・27次において、方形区画溝に埋められたと推定される屋敷地が認められるようになる。その後の近世においては、今回報告を行う第28・32次調査で検出された池状遺構をもつような屋敷地のほか、第30次調査では瓢形茶入が出土しており、屋敷地の広がりが推測される。また、第16・24次調査では近世寺院および埋葬に関連すると考えられる遺構が確認されている。さらに、第12次調査では18世紀の肥前系陶磁器と筑前系陶器が同一の土坑内から出土しており、当時の陶磁器使用の実態が垣間見え、原遺跡における近世の様相も次第に判明しつつある。



第1図 原遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)

第1表 原遺跡発掘調査一覧

次数	測量番号	主な遺構	報文
第1次	S50	杭列(弥生早~中期)、水田(古代)、溝(中世後期)	市報492集
第2次	S51	溝(弥生中期)、建物・井戸(中世前前期)	市報44集
第3次	S54	溝(弥生前~中期)、溝・杭列(古墳前期)	市報71集
第4次	S55	土坑(中世前期)	市報64集
第5次	S56	集落跡(弥生中期・古墳)	-
第6次	S57	土坑(古墳前期)、建物・溝・井戸(中世前前期)	市報213集
第7次	S58	井戸・土坑(中世前前期)	「文化財だより」
第8次	S59	要棺墓(弥生中期)、溝(古墳)、井戸・土坑墓(中世)	-
第9次	S60	整穴住居・溝(弥生)、溝(古墳前期)、館跡(中世後期)	市報140集
第10次	S61	建物・溝・井戸(中世前前期)	市報215集
第11次	S63	遺物散布地	市報266集
第12次	S65	獨立柱建物・溝・井戸(中世後期)	市報233集
第13次	S61	整穴住居(弥生中期)、土坑(中世前前期)	市報233集
第14次	H1	整穴住居・土坑(弥生中期)、建物・獨立柱・溝・井戸(中世前前期)	市報265集
第15次	H1	溝・土坑(中世前前期)	市報266集
第16次	H3	整穴住居・建物・独立柱(弥生早期)、建物・井戸(中世後期~)	市報237集
次数	測量番号	主な遺構	報文
第17次	H7	土坑(弥生前期)、整穴住居(古墳)、溝(中世)	市報444集
第18次	H7	建物・溝(古代~中世)	「年報」10
第19次	H8	溝・井戸・土坑(中世前~後期)	市報917集
第20次	H11	整穴住居・建物(弥生中期)、溝(中世前前期)	市報688集
第21次	H12	建物・井戸(中世)	「年報」15
第22次	H15	溝・土坑(弥生中~後期)、溝(中世前前期)、建物・溝(中世後期~)	市報818集
第23次	H18	溝・土坑(古~中世)	「年報」21
第24次	H20	溝(中世~近世)	「年報」23
第25次	H21	土坑(弥生後期)、建物・溝(中世後期)	市報1129集
第26次	H22	整穴住居・建物・窓穴(弥生早期)、建物・井戸・欄門(中世前前期)	市報1167集
第27次	H22	溝(中世後期)	市報1168集
第28次	H23	整穴住居・土坑(弥生前期)、溝・井戸(中世)	市報1199集
第29次	H23	溝・土坑(中世)	市報1200集
第30次	H23	溝(弥生)、獨立柱建物(中世)	市報1199集
第31次	H23	溝(弥生)、獨立柱建物(中世)	市報1201集
第32次	H24	土坑(古墳)、溝(中世前半)	本報告



第2図 原遺跡調査区位置図 (1/6,000)

### III. 第32次調査の記録

#### 1. 概要

今回報告する第32次調査地点（第3図）は原遺跡中央部よりやや東寄りに位置し、遺跡内の微地形上では微高地Aの中央に立地する。第32次調査地点は、第12次調査地点、第28次調査地点を挟んで東西に分かれているため、東側をI区、西側をII区として調査を実施した。I区・II区ともに調査前は標高約6mの宅地跡で平地であった。I区に隣接する西側では第12次調査、北側では第16次・第24次調査が、II区に隣接する東側では第28次調査が実施されている。

I区の層序は、約100cmの盛り土下に、一部黒灰色土、灰褐色～黒褐色土が見られ、その下、GL-160～180cmで地山の青灰色粘質土を検出した。またII区の層序は、約20cmの表土の下に黑色土が部分的に薄く堆積し、その下GL-40cmで黄褐色から淡黄色粘質土の地山を検出した。I区・II区とも、調査区内における地山の比高差はほとんどない。

I区の調査は平成24（2012）年11月7日に着手した。廃土置き場および水道管の関係から、調査区を北側、東側と西側に分けて調査を実施した。まず調査区の北側および東側部分の表土剥ぎを重機で行い、調査区周辺の整備、調査区内杭設定等の後、9日から遺構検出を開始した。その後、遺構掘削や遺構の実測、周辺測量、遺物の取り上げなどの作業を進め、高所作業車による写真撮影終了後、28日に重機で調査区の反転を行い、西側の調査を開始した。西側の調査は、北側および東側同様、重機での表土剥ぎの後、人力掘削で遺構の掘り下げを開始した。順次、遺構の実測等記録保存作業を行い、高所作業車による写真撮影のち、12月27日にI区の調査を終了した。

II区の調査は、平成25（2013）年1月7日に着手した。I区同様、重機で表土を剥ぎ、調査区周辺の整備、調査区内杭設定等を行った。遺構検出、遺構掘削や記録保存作業の後、高所作業車による写真撮影を行った。また、平成25年1月31日にII区に隣接する西側の追加試掘を行い、74mにおいて遺



第3図 第32次調査区位置図 (1/1,000)

構が確認されたため、調査区を拡張して引き続き調査を行った。なお、II区より西側では表土下で疊層となり、遺構は確認されなかった。拡張部分に関しても、重機による表土剥ぎの後、人力による遺構掘削を行い、実測および写真撮影等記録保存作業の後、高所作業車による写真撮影を行った。その後、3月1日に器材等の撤収を行い、3月5日に全ての調査を終了した。I区、II区を合わせた調査実施面積は382m<sup>2</sup>である。

調査時の遺構番号は001から3桁の通し番号を遺構の種別に間わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、報告書中の遺物番号は001から3桁の通し番号を付した。

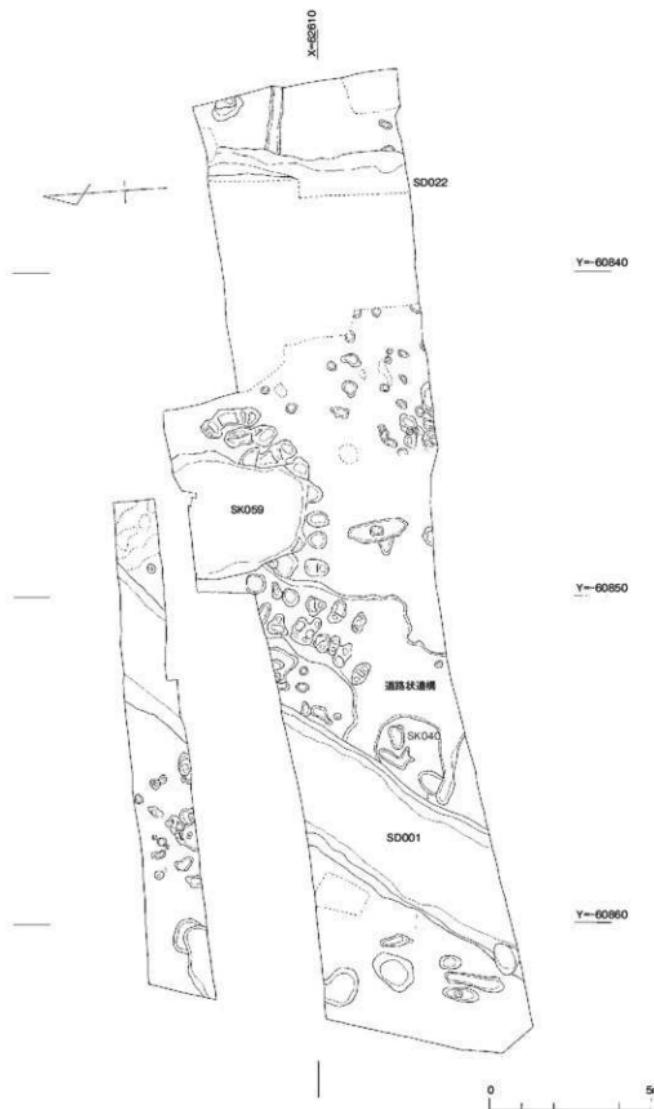
## 2. I区の調査

I区では、溝、土坑、ピットを検出したが、いずれも上面の大部分を削平されており、残存状況はあまり良くない。遺構検出面は黄褐色粘質土～青灰色粘質土で、いずれもやや砂質まじりである。

### 1) 溝

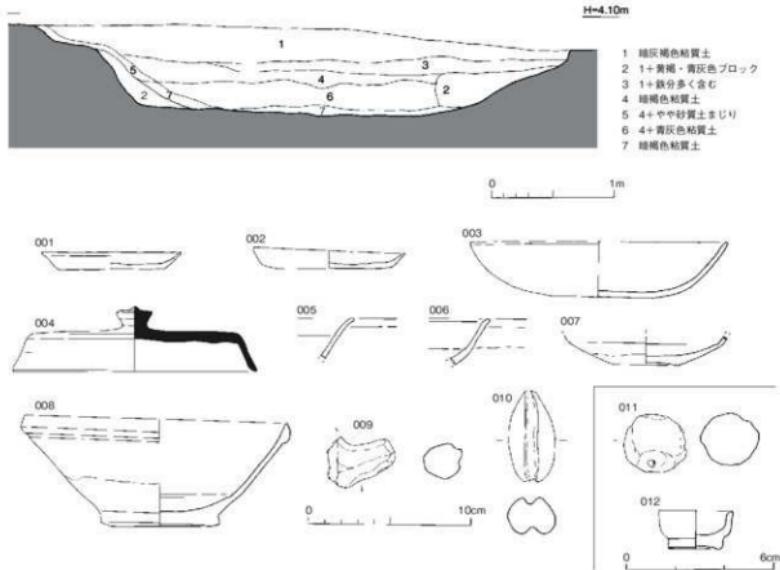
**SD001** (第5図) 調査区西側で、幅約3m、深さ約70cmの断面U字型の溝を検出した。床面は平坦である。調査区の南西から北東方向に向かって走り、さらに調査区の北および南方向にも延びると考えられる。調査区北側の試掘調査ではこの延長と思われる遺構が確認されているが、南側では見つかっていない。埋土は非常に粘性が強く、しまっていた。土層断面では水の流れた痕跡は観察されなかつた。ただし、木製品や甲虫の羽が残存していたこと、遺構床面がグライ化していたことから、ある程度水が溜まっている状況であったと考えられる。

出土遺物（第5・6図） 001・002は土師器小皿である。001は口径8.5cm、底径6.4cm、器高1.1cmを測る。内外面ともにナデ調整で、底部は幅5～7mmの渦巻き状の粘土紐痕が見られ、ヘラ切り後、ナデしている。胎土には細かい雲母片が混じる。002は口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。内外面ともにナデ調整だが、外面はやや風化している。底部は糸切り、板状圧痕が見られる。胎土は灰白色と橙色の粘土がマーブル状に混じっており、細かい雲母片が混じる。003は土師器壺である。口径15.6cm、底径5.8cm、器高4cmを測る。内外面とも一部に煤の付着が見られ、二次焼成を受けている可能性がある。内面は摩耗しており、底部には板状圧痕が観察できる。004は須恵器壺蓋である。口径14.8cm、器高3.9cmを測る。005・006は白磁碗の口縁部～胴部片である。005は灰白色的胎土に透明釉が施釉されている。006はやや黄味がかかった灰白色的胎土に透明釉が内面および外側胴部半ばまで施釉されている。007は碁笥底の白磁皿である。底径は3.8cmを測る。底部から胴外部内半ばにかけては露胎である。008はIV類白磁碗である。口径16cm、底径5.9cm、器高6.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、胴部下半から底部にかけては露胎である。009は瓶の把手である。下半分には煤が付着している。胎土には1～3mm程の白色粒を含む。010は有溝土錐である。長さ5.5cm、幅2.9cm、厚み2.2cmを測る。中央にV字～逆台形状の溝がめぐる。ほとんど摩滅していない。胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。011は径2.4cmを測る土玉である。浅黄橙色を呈し、精緻な胎土である。表面に見られる孔は貫通しておらず、人為的なものではない。重さは4.15gである。012はミニチュアの白磁碗である。口径3cm、底径2cm、器高1.55cmを測る。灰白の胎土に透明釉が施釉されている。内面には白く釉が溜まっている。底部は露胎である。013～019は下層から出土した遺物である。013は土師器壺、014・015は瓦器椀である。013は口径14cm、底径4.7cm、器高2.8cmを測る。底部はヘラ切りで、幅1.2～1.4cmの渦巻き状の粘土紐痕が観察できる。外面には一部赤色顔料が見られる。014は灰白色を呈し、復元口径16.6cm、底径6.2cm、器高5.2



第4図 I区遺構配置図 (1/150)

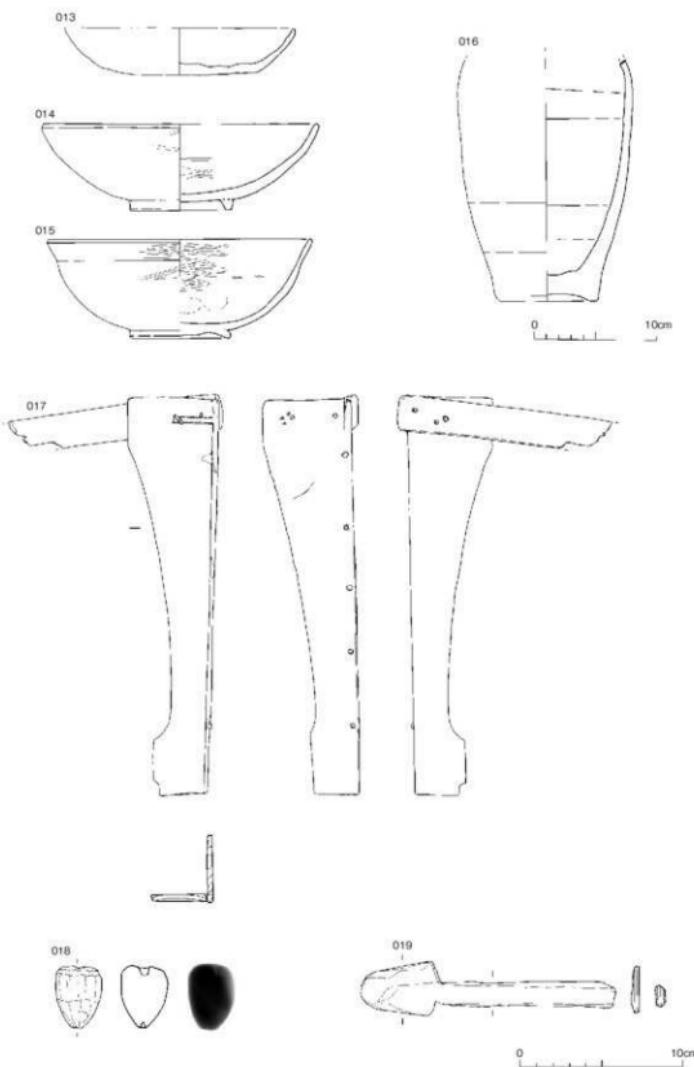
## SD001 (S=1/40)



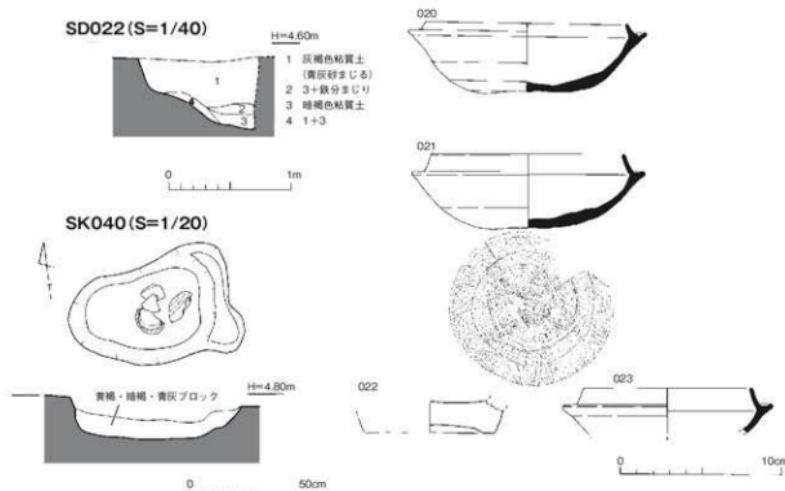
第5図 SD001実測図（1/40）および出土遺物実測図（011・012は1/2、他は1/3）

cmを測る。高台は輪状の粘土を貼りつけて作り出している。内外面ともに一部ミガキの痕が観察できるが、大部分は磨滅している。015は、口径16cm、底径5.8cm、器高6cmを測る。高台部分は輪状の粘土を貼りつけてある。また、内面には渦巻き状の粘土の痕が見られる。内外面ともにミガキが施されているが一部を残し、磨滅している。内面下半にはユビ押さえの痕が観察できる。また、内面胴部半ばには、細かい三日月状のような痕がほぼ同じ高さで連なり、ぐるりとめぐる。調整時の工具痕か。016は、底径7.7cmを測る中国製陶器の壺である。肩部付近までしか残存していないが、四耳壺の可能性もある。灰白色の胎土に1～2mm程の砂粒が混じり、釉調は灰緑色を呈する。底部は露胎で、外面上部は釉を剥ぎ取ってある。また、内面には1～3mm程の鉄分の粒がまばらに付着している。017～019は木製品である。017は折敷である。L字状の4本ある足のうちの1本で、厚さ約2～3センチの3つの部材が組み合わさっている。いずれの部材も板目取りである。側面には5つの木釘がほぼ等間隔に並び、もう一枚の板と結合している。また、他の足とのわたりの板は、樹皮によって留められている。出土した際には一部の部材は離れていたが、復元して実測を行った。018は独楽であると考えられる。福岡市埋蔵文化財センターにおいてX線撮影を行った結果、上部および下部の孔は貫通せず、いずれも途中で止まっていることが確認された。上面および側面には、丁寧で細かな削り痕が見られる。019は、全長16cm、最大幅3.4cm、厚さ6mmの板目取りの木製品である。匙状木製品、題簽、人形などの可能性が考えられる。これらの木製品は、いずれも硬くしまった材質であるが、樹種同定を行っていないため、木材の樹種は不明である。

SD022（第7図） 調査区東側で検出された南北方向に走る溝である。西側部分は、現代の擾乱に



第6図 SD001出土遺物実測図 (016は1/4、他は1/3)



第7図 SD022・SK040実測図 (1/20,1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

よって大きく削平されており、全形は不明である。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、染付が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

### 2) 土坑

**SK040** (第7図) 調査区中央で検出された不整形の土坑である。長さ67cm、幅40cm、深さ17cmで、黄褐色粘質土、暗褐色土、青灰粘質土ブロックが混じりあった埋土である。検出面から5cmほど掘り下げたところで2個体の須恵器が出土した。

出土遺物 (第7図) 020・021は須恵器の坏身である。020は口径12.4cm、器高4.1cmを測る。021は口径11.8cm、器高4.5cmを測る。底部に×印が刻まれている。

**SK059**(第4図) 調査区中央にて検出した。北側部分は埋設管の関係で未検出である。幅約29m、深さ約30cmの土坑である。埋土は、黒褐色粘質土に青灰粘土ブロックと黄褐色粘土ブロックが混じる。床面はやや砂の混じった青灰粘質土を呈している。この遺構の周辺には、楕円形～不整形の遺構が開むように検出された。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器等があるが、いずれも磨滅している。また、木を編んだ製品の一部も出土したが、残存状況は非常に悪く、図化できなかった。

### 3) その他の遺構

調査区中央で、深さ約10cmの浅い溝状の遺構を検出した。SD001およびSK059に切られている。埋土は、上面がやや砂質混じりの暗灰褐色粘質土で、下面は茶褐色、灰褐色の粗砂混じりの粘質土である。北側床面では波板状凹凸面を伴うこと、埋土および床面に、泥やぬかるみを踏み込んだ際にできるマーブル状の堆積が見られることから道路状遺構として想定した。

出土遺物 (第7図) 022は弥生土器の底部である。底径は8cmを測る。全体的に磨滅しているが、外面はヨコナデが見られる。色調は灰白色を呈し、胎土には1～3mm程の白色粒や赤色粒、細かい雲母片を含む。023は復元口径10.2cmを測る須恵器の坏身である。

### 3. II区の調査

II区では、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、ピットを検出した。I区と異なり、遺構検出面は黄褐色粘質土で、一部赤茶褐色の礫層が露出する。溝や土坑、ピット内から弥生時代中期の遺物が出土しているが、当該期の遺構は検出していない。

#### 1) 掘立柱建物

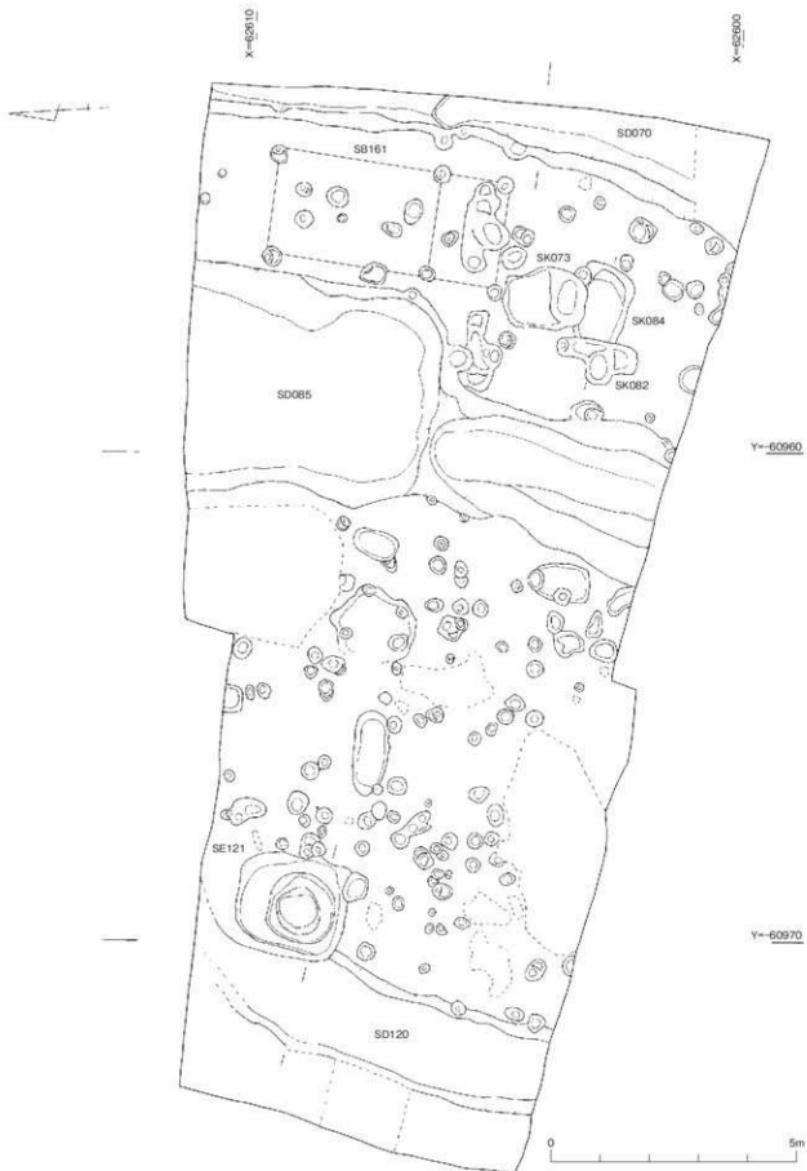
**SB161** (第9図) 調査区東側で検出した。1×2間の建物である。出土遺物はいずれも小片のため図化できなかった。

#### 2) 溝

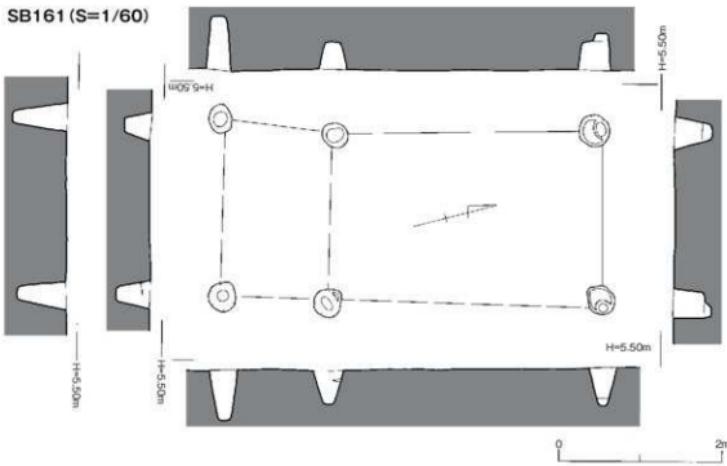
**SD085** (第10図) 調査区中央で検出した。幅約2~3mの南北方向に走る溝が、北側部分は大きく広がり水溜り状の遺構を形成する。この水溜り状遺構は幅約4.3m、深さ1~1.2mを測り、断面U字型を呈する。床面は礫層で、ここから湧水した。埋土は粘性が強く、しまっている。底面付近の土層断面8~10には拳大の礫が多く混じる。また、9と10の粘質土からは木質も確認されたが、いずれも脆く、製品はなかった。

出土遺物 (第10図・第11図) 024・025は突帯文の甕である。024は復元口径22.2cmを測る。胴部の突帯には刻み目が見られるが磨滅している。025の突帯にも刻み目が見られる。内面の一部に赤色顔料が観察できる。また内面口縁部下に押圧痕が見られる。026は如意口縁の甕である。口縁部内面には赤色顔料が塗布されている。027・028は弥生土器の底部である。027は底径7.3cmを測る。外面はハケメ調整、底部内面はユビ押さえ、ナデによる調整が施されている。028は底径7.5cmを測る。外面にはハケメの痕が観察できる。029は壺の胴部である。M字状の突帯が2条めぐる。外面には赤色顔料が塗布されている。内面はナデ調整である。030は底径4.9cmを測る青磁碗の底部である。内面には花文が押印されている。周辺を意識的に打ち欠いている。豊付から高台内面は無釉である。031は備前の擂鉢である。口縁端部を肥厚させ、さらに上端をつまみ上げて断面三角形状の口縁を形成する。にぶい赤褐色を呈し、胎土には1~3mm程の砂粒を含む。残存状況からは擂り目の単位は不明である。032は復元底径16cmを測る陶器甕の底部である。釉調はオリーブ色を呈し、胎土は赤褐色と褐色がマーブル状に混じる。内面にはタタキの痕が見られるがナデ消されており不明瞭である。また、底部には一部目跡が観察できる。033・034は直行する口縁をもつ瓦質の羽釜である。033は復元口径12.2cmを測る。灰黄褐色を呈し、内面頭部にハケメおよびユビ押さえが見られる他はナデ調整である。034は復元口径9.3cmを測り、黒色を呈する。内面はハケメが見られるが、外面肩部は横向方向のミガキが施されている。また胴部には煤が付着している。035は復元口径14.8cmを測る瓦質擂鉢である。淡黄色~灰白色を呈し、胎土には1~3mm程の白色粒を含む。底部には一部ハケメが残る。胴部の擂り目の単位は4条で、底部には渦巻き状の擂り目が施されている。036は三足鍋の脚部である。灰白色を呈し、胎土には1mm以下の白色粒が混じる。外面上部には煤が付着している。037は不明土製品である。残存している大きさは、長さ7.1cm、幅6.3cm、厚み2.8cmを測る。上部および裏面は欠けており、全形は不明である。淡黄色を呈し、胎土には1~4mm程の白色粒および赤色粒、雲母片を含む。焼成前に施された孔には、擦痕は観察できない。038は鉄滓である。長さ6.6cm、幅5.3cm、厚さ2.7cm、重さ563gを測る。039は凝灰岩製の石臼の上臼である。外径は20cm前後、内径は7cm前後である。全体的に磨滅しており、ふくみ部分はほぼすり減っている。040・041は石斧である。040の大型蛤刃石斧は重量405g、041は重さ161gを量る。

**SD070** (第11図) 調査区東側で検出した。東肩は調査区外のため、調査した部分から推測すると約1.4mの幅の溝になると考えられる。南側は擾乱によって削平されている。埋土の堆積状況は、水



第8図 II区遺構配置図 (1/100)



第9図 SB161実測図 (1/60)

平堆積をなし、下部にいくにつれて粘性が強くなる。

出土遺物（第11図）042は土師器小皿である。口径7.2cm、底径4.8cm、器高1.45cmを測る。底部は糸切り、内外面に煤が付着しており、二次焼成の可能性がある。043は土師器壺である。復元口径11.6cm、底径6.6cm、器高1.95cmを測る。底部は糸切りである。044は火舎である。外面の2条の突帯の間に四菱文が押印されている。045は土製の方形の盤であると考えられる。内外面ともナデ・ユビ押さえによる調整である。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒、雲母片を含む。046は黒曜石のスクリペイバーである。長さ1.6cm、幅2.5cm、厚さ7mm、重さ1.64gをはかる。

**SD120**（第12図） 調査区西側で検出した。幅2～2.3m、断面U字型の南北方向に延びる浅い溝である。暗茶褐色粘質土と黒褐色粘質土の粘性の強い埋土で、床面は赤茶褐色の礫層が露出する。北側でSE121に切られている。

出土遺物（第12図）047～062は上層の暗茶褐色粘質土から出土した遺物である。047は復元口径35cmを測る如意口縁の甕である。胴部突帯には一部刻み目が見られるが、ほとんど埋滅してしまっている。全面に赤色顔料が塗布されており、胎土には1～3mm程の白色粒を含む。048は復元口径26.6cmを測る甕である。049・050は甕の底部である。049は底径6.7cmを測る。胎土には1～2mm程の白色粒を多く含む。内面はナデ調整で一部煤が付着する。050は底径7.4cmを測る。051～054は甕の底部である。051は底径9.8cmを測る。外面はハケメ調整で内面および底部はナデ調整である。黒灰褐色を呈し、胎土には1mm程の砂粒や細かな雲母片を含む。055～057は土師器の小皿である。055は口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.4cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には細かい雲母片を含む。底部は板状圧痕が見られる。056は口径9cm、底径7.4cm、器高1cmを測る。内外面ともナデ調整で、底部は糸切りである。057は口径9.3cm、底径7.3cm、器高1.7cmを測る。色調は橙色を呈し、内外面ともナデ調整である。底部は糸切りである。058～060は土師器壺である。058は復元口径16.6cm、底径9cm、器高2.8cmを測る。色調はにぶい橙色で、胎土には細かい砂粒、雲母片を含む。内外面ともナデ調整で、底部

は糸切り、板状圧痕が見られる。059は口径15.8cm、底径10.6cm、器高2.7cmを測る。内外面ともナデ調整で、底部は糸切りである。色調は浅黄橙色を呈する。060は口径14.4cm、底径9.8cm、器高3.6cmを測る。内外面ともナデ調整で底部は板状圧痕が見られる。色調は橙色を呈し、1~2mm程の砂粒や雲母片を含む。061・062は瓦器碗である。061は、復元口径17.1cm、底径6.1cm、器高5.9cmを測る。内外面ともミガキが施されているが、ほとんど磨滅している。内面に×印が焼成後に細い針のようなもので刻まれている。062は、口径16.4cm、底径7cm、器高4.6cmを測る。色調は橙色を呈する。外面はナデ調整、内面はミガキだが磨滅しており、はっきりしない。

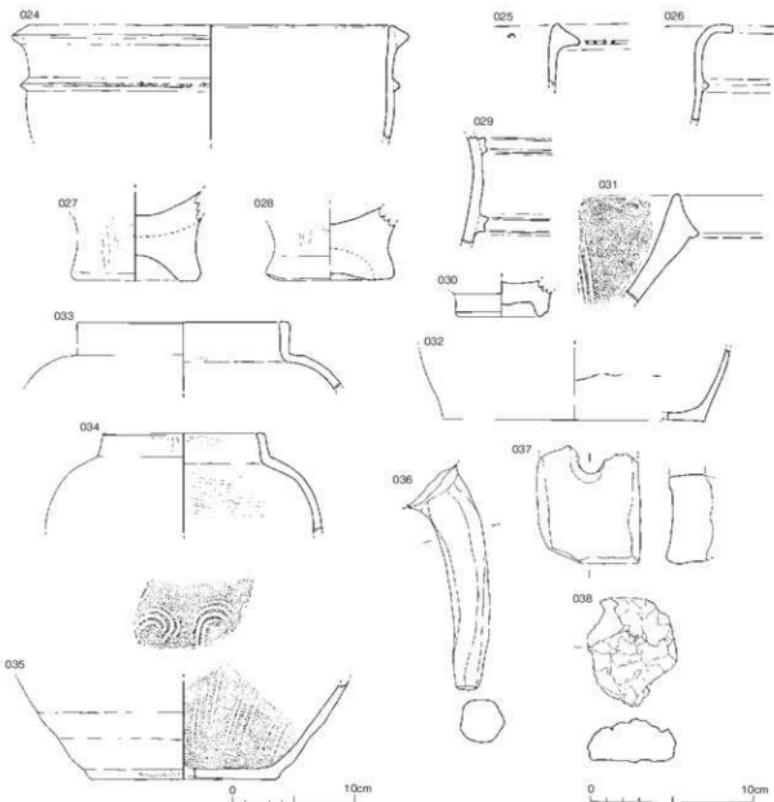
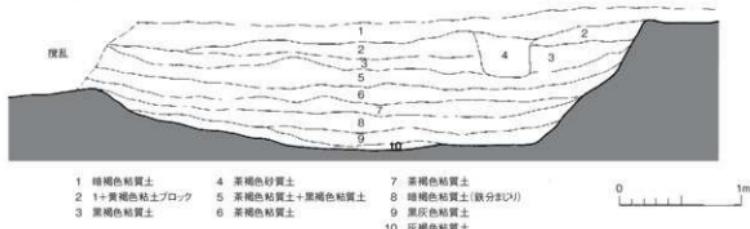
063~082は黒褐色粘土質の下層から出土した遺物である。063は壺の口縁部である。復元口径23cmを測り、内外面ともナデ調整である。色調は浅黄橙を呈し、胎土には1~3mm程の白色粒、雲母片、角閃石を含む。064は復元口径25cmを測る鋤先口縁壺の口縁部である。内外面ともナデ調整で、赤色顔料が塗布されている。065は壺の胴部である。M字状の突帯には上下とも刻み目が観察できる。066は土師器小皿である。口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土には細かな雲母片を多く含む。内外面ともナデ調整で、底部は糸切り、板状圧痕が確認できる。067~069は土師器の坏である。067は復元口径15cm、底径6cm、器高3.1cmを測る。内外面ともナデ調整で、底部はヘラ切り後ナデしている。068は口径15.5cm、底径10.5cm、器高3.2cmを測る。胎土は橙色と灰白色の土がマーブル状に混じる。内外面とも磨滅しており、底部の切り離し技法は明確には確認できない。069は口径15.6cm、底径11cm、器高2.7cmを測る。内外面ともナデ調整で、底部は糸切りである。色調は浅黄橙~褐灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。070は天目碗である。復元口径12cmを測る。071~080は白磁碗である。071は口縁部が外反する。胎土は灰白色で内外面とも施釉されている。072は直に外反する器形である。口径は16.4cmを測る。外面は胴部下半が露胎、内面は一部露胎していることが観察できるので、蛇の目釉剥ぎしている可能性もある。073は復元口径17cmを測る。胎土は黄味がかかった灰白色である。内面に柳目文が施される。074は、復元口径15.3cm、底径5.8cm、器高6.6cmを測る。075・076は玉環白磁碗である。075は復元口径14.6cmを測る。076は復元口径15.6cmを測る。077~080は白磁碗の底部である。081・082は白磁皿である。083は復元底径10.2cmを測る越州窯系青磁碗である。内面および疊付には目跡が残る。黄灰褐色の胎土で、全面に施されている釉調は暗いオリーブ色を呈する。084は復元底径8.8cmを測る陶器の壺である。胎土は青灰色を呈し、1mm程の砂粒が混じる。濃いオリーブ色を呈する釉は全面に施釉されている。085~087は滑石製石鍋である。085は内外面とも整形時の工具痕が確認できるが、内面には使用痕と思われる細かいキズも観察できる。086・087は外面に煤が、また087の内面には炭化物が付着している。088は滑石製の温石である。石鍋の転用品の可能性がある。内外面から穿孔を施している。089は羽口である。外径は8.5cm前後、内径は4cm前後である。胎土には細かい砂粒やスサが混じる。外面は一部赤変している部分や煤が付着している部分が見られる。090は平瓦である。外面には縄目が確認できる。091~093はいずれも石材は黒曜石である。091は細石刃の可能性が考えられる。長さ2.1cm、幅0.8cm、厚さ0.35cm、重さ0.75gである。092は剥片である。長さ1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.32gである。093はスクレイパーである。長さ3cm、幅3cm、厚さ0.95cm、重さ8.59gである。背面の一部には古いバティナが見られる。

### 3) 井戸

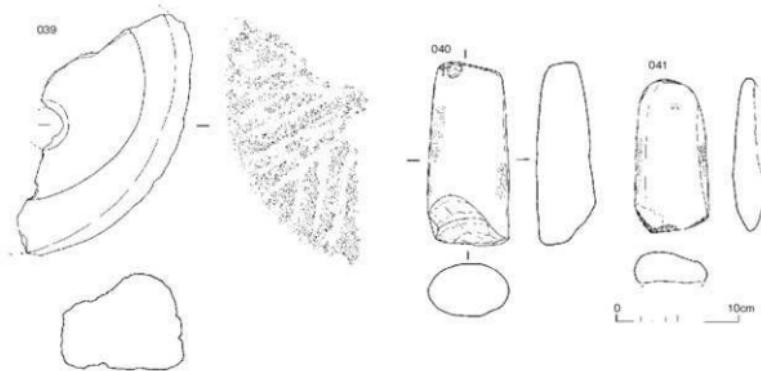
SE121（第15図） 調査区北西で検出した。SD120を切っている。幅約2m、深さは1.2mである。掘り進めていくと、地表から1m下付近で湧水した。また底部の壁面には、竹製の簾が張り付いて残つており、この井戸は井戸枠に木桶を使用していたことがわかる。第15図に示す土層断面のうち、1~9を上層、10・11を下層として遺物を取り上げた。

SD085 (S=1/40)

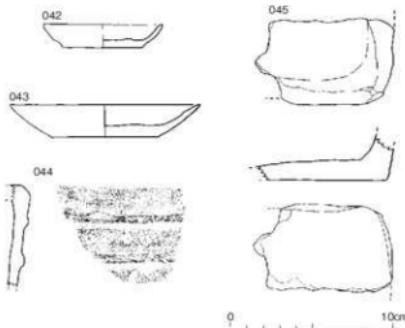
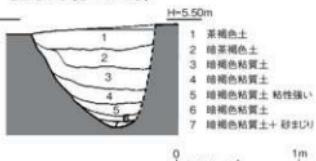
H=5.70m



第10図 SD085実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (035は1/4、他は1/3)

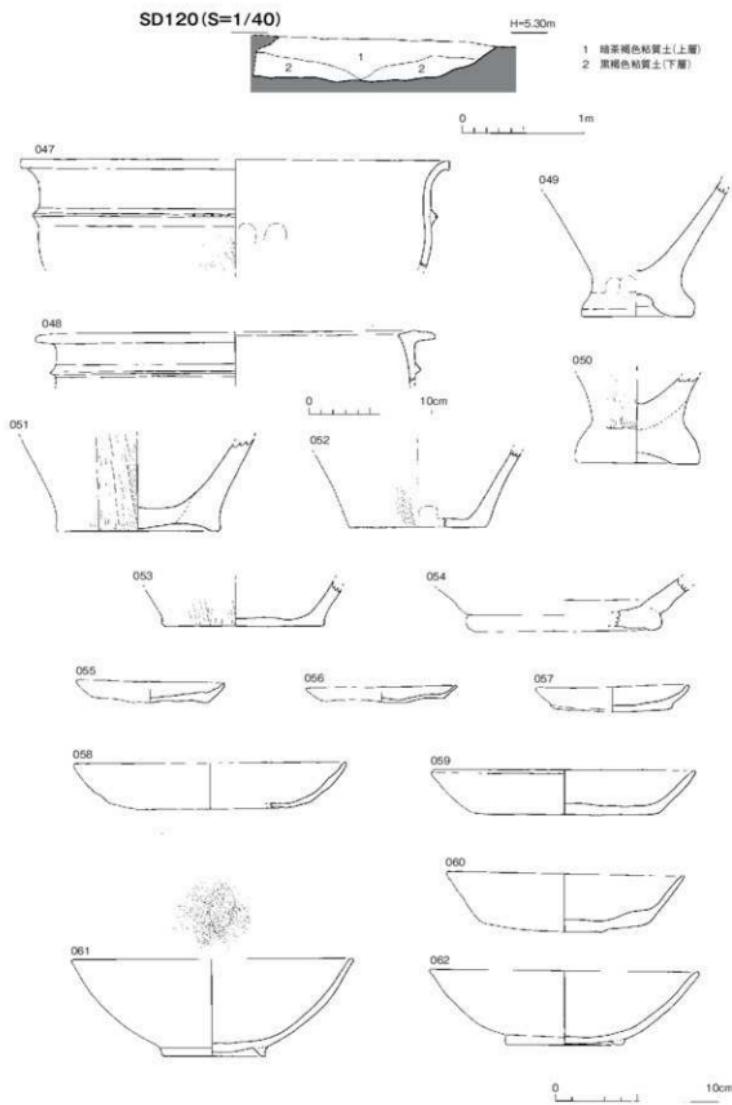


SD070 (S=1/40)

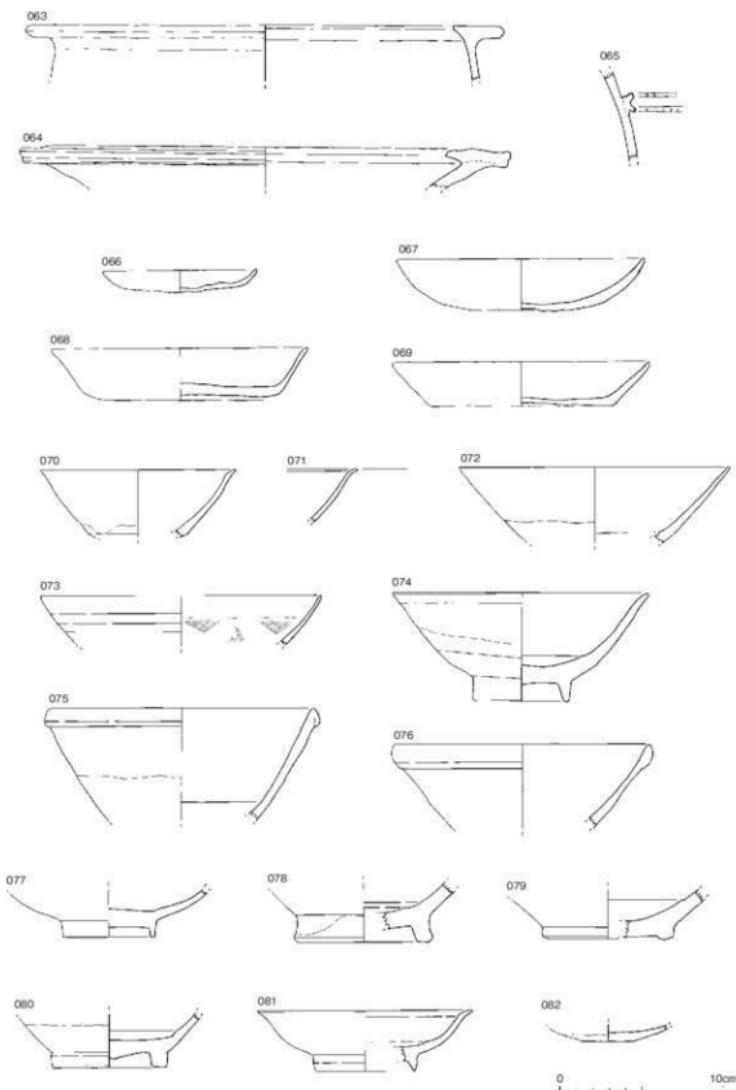


第11図 SD070実測図(1/40)およびSD085-070出土遺物実測図(046は1/1、039~041は1/4、他は1/3)

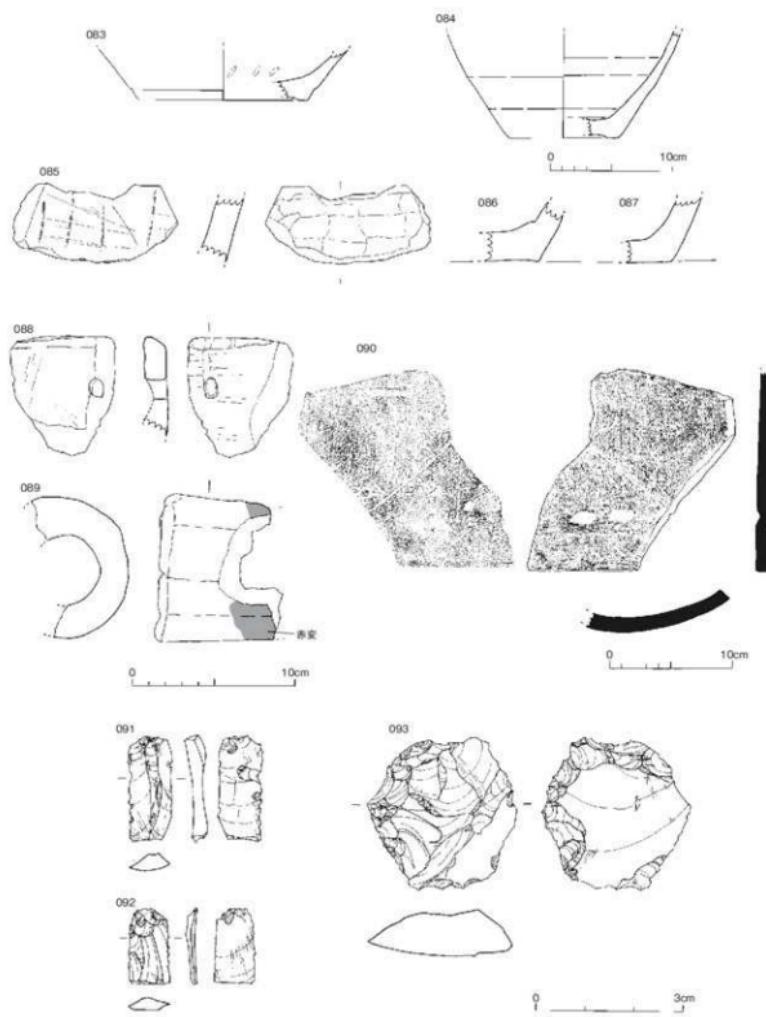
出土遺物（第15図・第16図）094～107は上層の遺物である。094・095は壺口縁部である。094は口径33cmを測る。内外面ともナデ調整で、内面および外面口縁部下まで赤色顔料が残る。また外面胴部には一部黒斑が見られる。095は外面および内面口縁部下まで赤色顔料が施され、調整はナデ調整である。胎土には2～3mm程の白色粒および細かな雲母片が混じる。096は底径8.4cmを測る壺の底部である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。097は壺の口縁部である。口唇部には刻み目が施される。内外面ともナデ調整である。098は壺の胴部である。M字状の突帯がめぐる。099は底径9.6cmを測る器台である。外面は一部ハケメが残るもの、大部分は磨滅している。また外面底部付近はヨコナデによる調整である。内面は縦方向の削りが施され、内面底部ではヨコナデによる調整が観察できる。100～102は土器師小皿である。100は口径8.7cm、底径6.3cm、器高1.25cmを測る。内外面ともナデ調整で、底部は糸切り、板状圧痕が確認できる。胎土は橙色と灰白色のマーブル状を呈する。



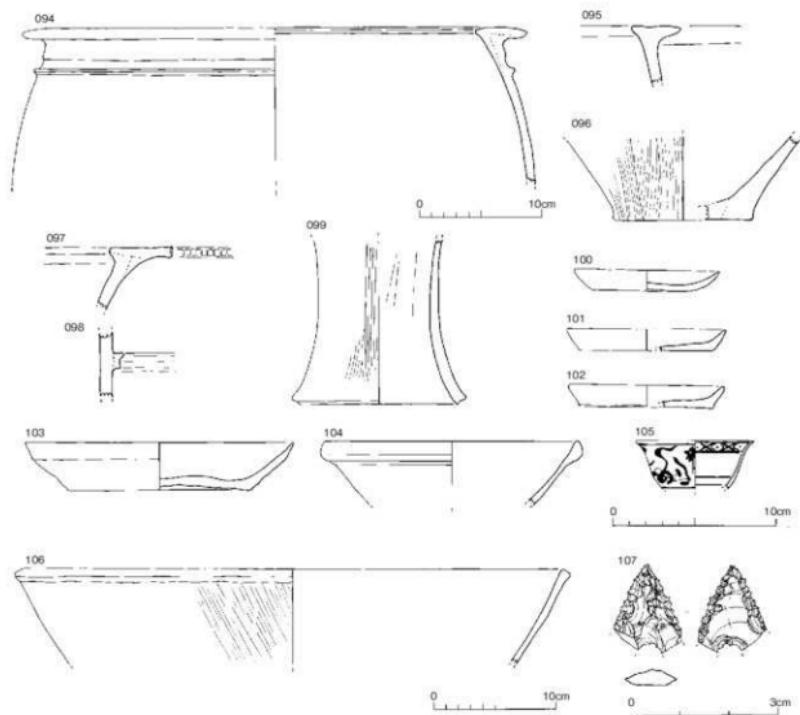
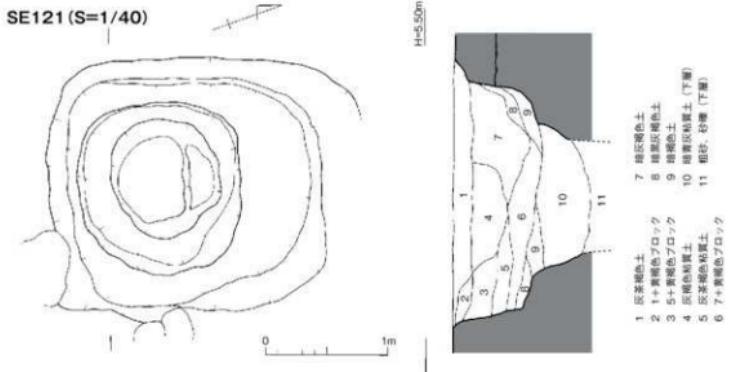
第12図 SD120実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (047・048は1/4、他は1/3)



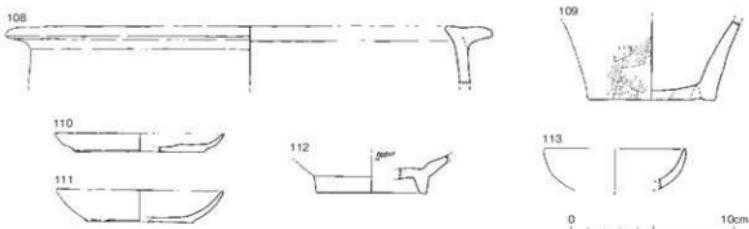
第13図 SD120出土遺物実測図 (1/3)



第14図 SD120出土遺物実測図 (091~093は1/1、084・090は1/4、他は1/3)



第15図 SE121実測図(1/40)および上層出土遺物実測図(107は1/1、094・106は1/4、他は1/3)



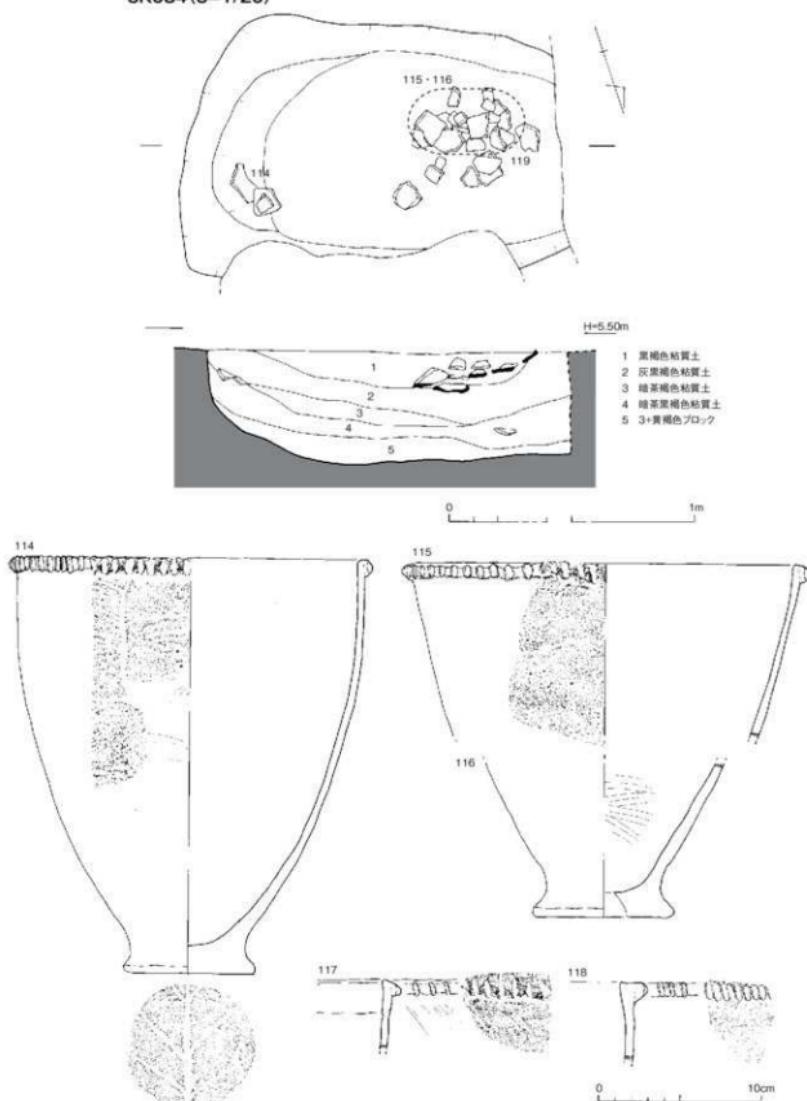
第16図 SE121下層出土遺物実測図 (1/3)

101は復元口径9.4cm、底径8.2cm、器高1.3cmを測る。内外面とも磨滅している。底部は糸切りである。102は復元口径9.2cm、底径8cm、器高1.35cmを測る。内外面とも磨滅しており、底部は糸切りによる切り離しである。103は土師器壺である。復元口径16.4cm、底径11cm、器高2.9cmを測る。胎土には細かい雲母片が多く含む。内外面ともナデ調整で、底部は糸切り、板状圧痕が確認できる。104は玉縁白磁碗である。復元口径は15.6cmを測る。全面施釉されている。105は復元口径7.2cmを測る青花小碗である。内面口縁部下には四文櫛文、外面には草花文が描かれる。胎土は灰白で釉調は透明に発色する。106は瓦質の鉢である。復元口径は44cmを測り、内面はナデ調整、外面にはナナメ方向のハケによる調整が見られる。また外面には全面に煤が付着している。胎土には雲母片を多く含む。107は黒曜石製石鎌である。脚部を両方とも欠いているが、残存している長さは2.3cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.72gである。裏面の主要剥離面は古いバティナであるため、二次加工されている可能性も考えられる。108～113は下層出土の遺物である。108は復元口径24.2cmを測る壺である。胎土には1～3mm程の白色粒を含む。内外面ともナデ調整である。109は復元底径7.6cmを測る壺の底部である。外面はハケメ調整が観察できる。また内面底部には一部炭化物が付着している。断面および底部の観察により、胴部と底部の接合方法は、紐状の粘土を渦巻き状に成形し円い形にしてから胴部と接合する方法が確認できる。110・111は土師器小皿である。110は復元口径10.2cm、底径8cm、器高11cmを測る。内外面とも磨滅しているが、底部の糸切りによる切り離しは確認できる。111は復元口径10.2cm、底径6.6cm、器高1.9cmを測る。胎土には細かな雲母片を多く含む。底部は糸切りである。112は同安窯系白磁碗である。底径6.6cmを測る。内面には櫛目文が施される。底部は露胎で、底部内面は幅1cmの蛇の目軸はぎである。胎土には細かな黒い粒が観察できる。113は陶器の小碗である。復元口径は8.6cmを測る。胎土は赤褐色粘土内に1mm程の白色粒が見られ、全面に施された釉薬は緑褐色を呈する。

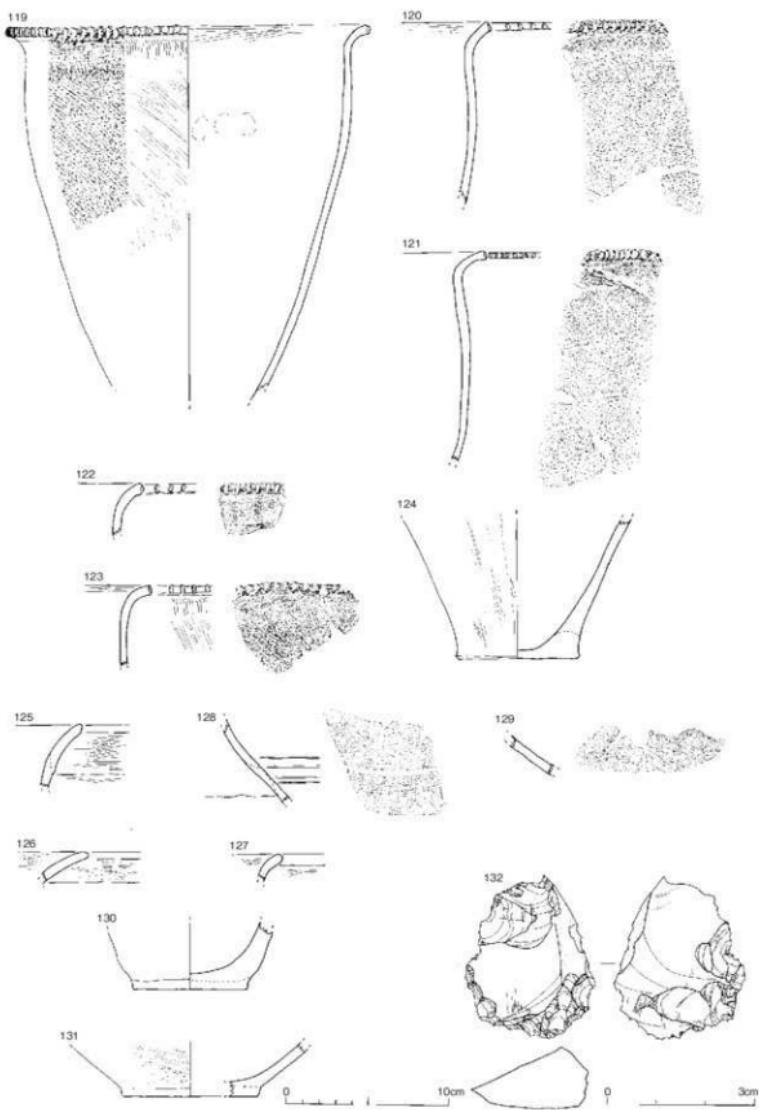
#### 4) 土坑

**SK084** (第17図) 調査区南東側で検出した。長さ154cm、幅95cm、深さ約43cmの楕円形の土坑である。SK073およびSK082に切られている。SK073からは弥生土器片および土師器が出土している。またSK082からは、弥生土器片、底部糸切り土師器のほか、陶磁器や黒曜石が出土している。SK084は、遺構検出時において上面に土器が露出していた。埋土は全体的に粘性の強いしまった土で、黒褐色を呈する。土層断面の観察から、人為的に一度に埋め戻したのではなく、自然に時間をかけて埋まっていた状況が確認できる。第17図に示す土出土状況は上層における様相である。遺物がまとまって出土したのは上層からである。他の層からもまんべんなく遺物の出土が見られたが、いずれもまとまりは見られなかった。出土した遺物を接合したところ、114～116、119が同一レベルで出土しているこ

SK084 (S=1/20)



第17図 SK084実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)



第18図 SK084出土遺物実測図 (132は1/1、他は1/3)

とがわかった。

出土遺物（第17図・第18図）114～118は突帯文の壺である。114は口径21cm、底径7.8cm、器高25.8cmを測る。底部には木葉痕が見られる。胴部外面上部はナメ方向の条痕、半ばは横方向の条痕により調整されている。下部は磨滅しており不明である。口唇部はナデ調整である。刻み目下には、刻み目を付けた際の工具痕が縦方向に残っている。また、外面には口縁部下から全体にかけて煤が付着しており、内面の底部付近には炭化物が残っている。115は復元口径23.4cmを測る。外面は磨滅しており、調整方法は不明瞭である。胎土には、2～3mm程の白色粒、赤色粒、雲母片を含む。116は復元底径8cmを測り、底部には焼成後穿孔が施されている。内面は条痕による調整が見られ、全面に炭化物が付着している。117の外面は条痕による調整後ナデである。118は横方向のナデが観察できる。また外面には煤が付着している。119～123は如意口縁の壺である。119は復元口径22cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、胎土には1～3mm程の白色粒を多く含むほか、赤色粒や雲母片も混じる。口縁部には刻み目を施し、外面はハケメによる調整である。胴部半ばには一部煤が付着している。内面には一部ユビ押さえの痕が観察できるが、口縁部内面に横方向のハケメが残る以外はナデによる調整である。121は口縁部に密に刻み目を施す。外面はハケメ後ナデ調整を施している。122の口縁部下には一部赤色顔料が残る。123の外面はハケメ後ナデ調整を施しており、一部ハケメが残る。124は壺の底部である。復元底径は7cmを測る。外面はハケメ後ナデ調整を施してある。内面の底部から胴部にかけては一部炭化物が付着する。125～127は壺の口縁部である。125は内外面ともミガキが施されているが内面のミガキは不明瞭である。また外面には一部赤色顔料が付着している。頭部には段がつく。126・127は口唇部のみナデ調整で外面はミガキが施される。128・129は壺の胴部である。128の外面はミガキが施され、赤色顔料が塗布されている。内面はナデ調整である。外面には4本の沈線がめぐる。129は、外面に弧状の沈線および横方向の沈線が確認できる。128同様、外面はミガキ調整が施され、赤色顔料が塗布されている。130は復元底径7cmを測る、壺または鉢の底部である。淡黄色を呈し、胎土には1～2mm程の白色粒を多く含むが、内外面とも磨滅しており、調整は不明である。131は鉢の底部である。復元底径は8.2cmを測る。灰黄褐色を呈し、胎土には1mm程の白色粒を多く含む。外面はミガキが施され、内面および底部はナデ調整である。132は黒曜石のRFである。長さ3.3cm、幅2.5cm、厚さ1.2cm、重さ8.95gである。

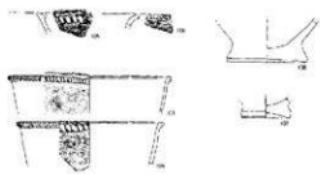
#### 4. 結語

今回の第32次調査においては、掘立柱建物、溝、井戸などを検出した。これらの遺構の時期は弥生時代前期、古墳時代後期、中世前期、近世に該当する。特に中世前期の溝（SD001）は、隣接する第12・28次調査の成果とともに、原遺跡内における拠点集落が存在した可能性を示す資料である。また、II区の土坑内からは残存状況の良い弥生時代前期の土器が出土した。これまでにも第16・17・26・28・32次調査の5地点で、当該期の土器が出土している。ここでは、原遺跡内における弥生時代前期の遺構、そのなかでも突帯文土器と板付式土器が同一内の遺構から出土しているものについて示し、簡単にまとめてみたい。ただし、他の遺構との切り合いが不明なものは省いた。

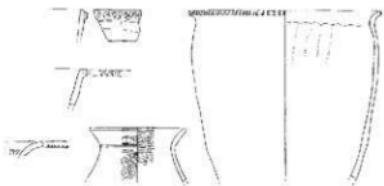
これまで原遺跡で行われた32次の調査のうち、弥生時代前期の遺構が検出されている5地点は、いずれも微高地Aの南側に位置している（第2図）。特に第26次調査では、掘立柱建物や堅穴住居、土坑などから当該期の土器が多く出土している。

これらの土器のうち、壺の特徴を挙げると、突帯文土器は、①口縁部突帯貼付位置が口縁部からやや離れて貼り付けられるもの、②口縁部に接して下向きの傾斜面を持つように貼付するもの、③突帯

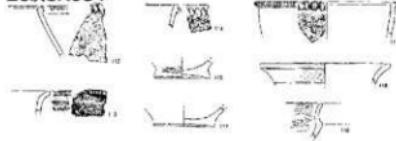
26次SK080



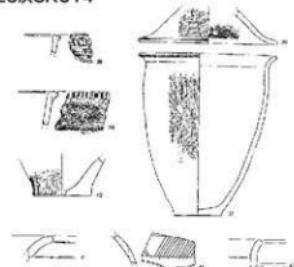
16次SK025



26次SK084



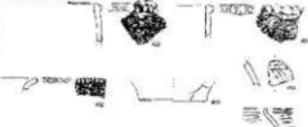
26次SK014



26次SK203

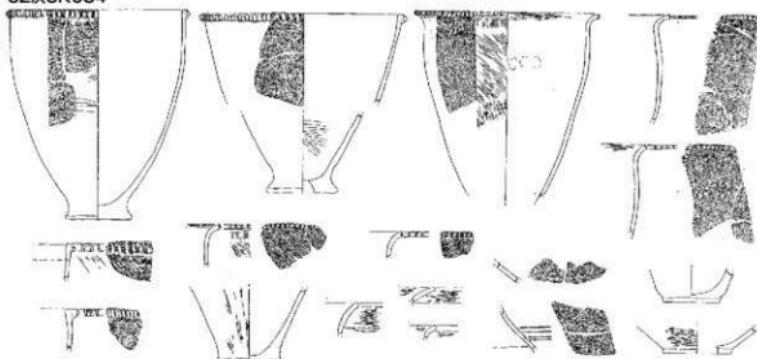


26次SC301



26次  
SK039

32次SK084

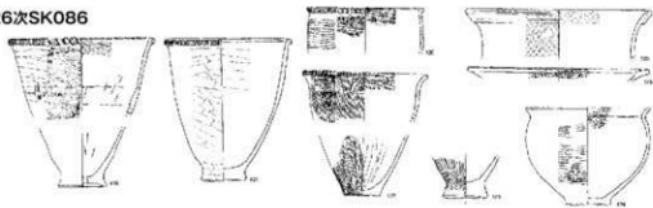


26次SK020

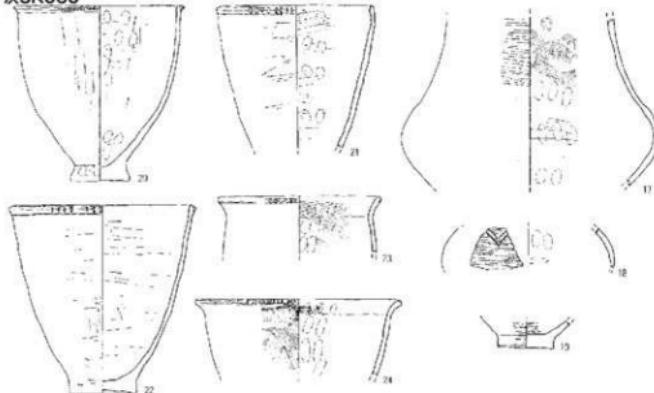


第19図 原遺跡出土弥生時代前期土器①（縮尺不同）

## 26次SK086



## 17次SK060



第20図 原遺跡出土弥生時代前期土器②（縮尺不同）

が口縁端部に覆いかぶさるように貼り付けられて上面が平坦に仕上げられるものがある。板付式土器の壺の口縁部は、④典型的な如意口縁をもつもの、⑤口縁部が「く」字形に短く屈曲するものに分けられ、⑥刻目の位置が全面に施されるものと、⑦口唇下部に施されるものがある。壺は、⑧頭部が長く口縁部の外反が大きく肩の張りが弱いもの、⑨口縁部を肥厚して外反するもの、⑩口縁部下に段がつくものがある（第19・20図）。

第32次調査SK084で出土した突帯文壺の口縁部突帯は、太めの突帯が口縁端部に覆いかぶさるように貼り付けられて上面が平坦に仕上げられている。刻目は棒状工具で深く刻むものと、ヘラ状工具で施すものとがある。外面の調整は貝殻条痕、内面は条痕による調整が見られるものもあるが、他は磨滅しており不明である。また、板付式の壺は如意形口縁の外反が強く、口径は広い。刻目は口唇部全面に施される。外面の調整は縦方向およびナナメのハケメ調整。口縁部内面に横方向のハケメが残る以外はナデ調整および一部ユビ押さえが見られる。壺は小片であるが、頭部にわずかながら段を持つ。これらの壺は第26次調査SK086出土の遺物に、壺は第26次調査SK014の遺物に類似するが、点数が少なく全体の形も不明なため詳しく述べることはできない。

第32次調査出土遺物を含め、上記に挙げた遺構内出土の土器の共伴関係については出土状況等から問題点が残り、編年的な位置づけは困難であるが、原遺跡周辺の橋本一丁田遺跡、有田遺跡群、石丸古川遺跡などにおいても突帯文土器と板付式土器が出土しており、今後の資料の増加・研究で当該期における早良平野の地域性の解明が進むことを期待したい。



1. I 区南側全景（北から）



2. I 区北側全景（東から）



3. SDG22土層（北から）



4. SKD40（南から）



1. I区西側全貌 (東から)



2. SD001 (南から)



3. SD001 土層 (南から)



4. 道路状遺構 (南から)



5. SK059 (東から)



1. II区東側全景（西から）



2. SB161（西から）



3. SD070（南から）



4. SK084土層（北から）



5. SK084完掘（北東から）



2. SD120（西から）



3. SD120土層（南から）



4. SE121土層（北から）



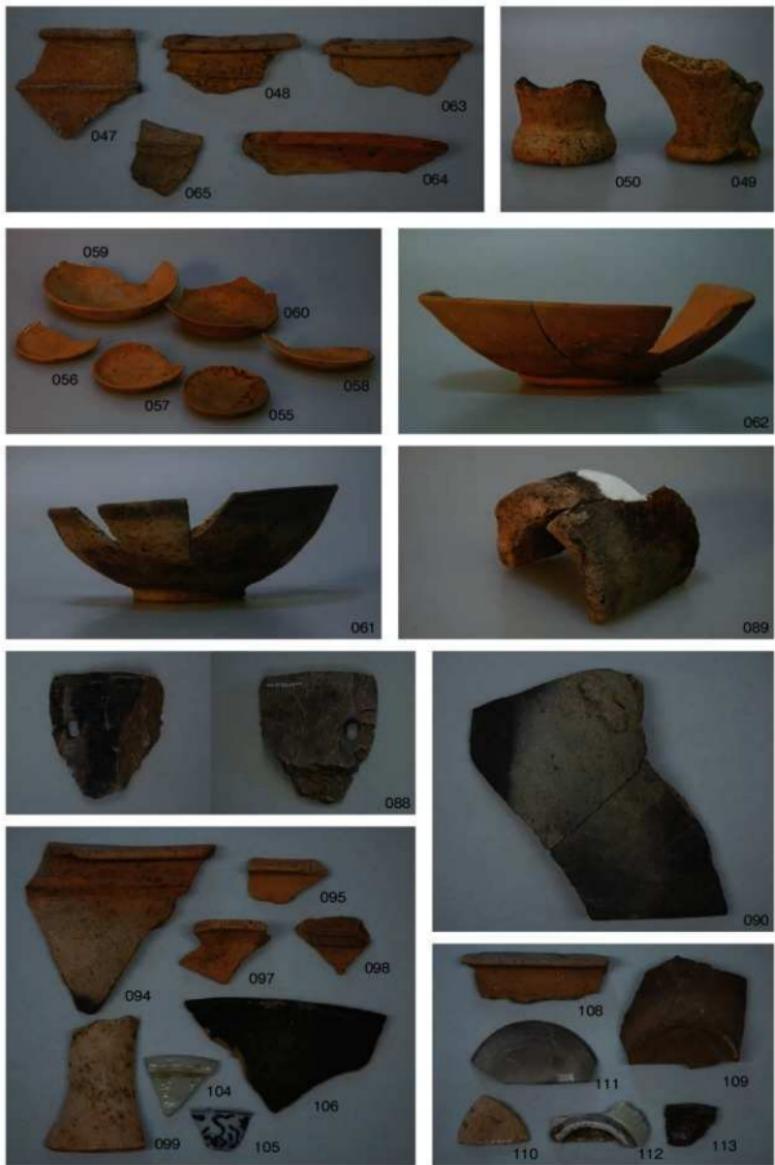
5. SE121（北から）



出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)

## IV. 原遺跡第28次調査の記録（近世編）

1. 概要 この報告は2011年9月20日から2012年3月27日まで発掘調査を行った原遺跡第28次の調査報告である。第28次調査で出土した遺構の時期は大きく3期に分かれる。内訳は第1期が縄文晩期末～弥生時代中期、第2期は古代（11世紀後半～12世紀後半）、第3期が近世～近代で、この他に遺構は確認できなかったが、後世の遺構から弥生時代中期前葉～後葉にかけての壺棺片や古墳時代後期の須恵器甕や須恵器壺、中世後半の青花碗や脚付土鍋が出土しており、近隣に弥生時代中期の壺棺墓群や、古墳時代の集落が存在したと推定される。

3期のうち第1期と第2期の遺構に関しては福岡市埋蔵文化財調査報告書第1199集「原遺跡16」（2013年）で報告済みである。今回はまずは弥生時代～古代の概要を述べた後に第1199集で報告できなかった第3期の近世から近代の遺構について報告し、第1・2期の遺物についても若干記載する。

### 1) 28次調査 弥生時代～古代の遺構と遺物

#### 第1期 縄文時代晩期～弥生時代中期

縄文時代晩期から弥生時代中期の遺構は縄文晩期末～弥生時代前期初頭と弥生時代中期の2時期に分けることができる。縄文時代晩期末から弥生前期初頭の遺構はI区で土坑4基（SK004・SK008・SK010・SK033）と柱穴群、II区では柱穴を数基確認した。SK004・008・033は平面形は異なるが、断面は浅皿状を呈し、底面は平坦である。貯蔵穴と推定される。それに対しSK010は底面に凹凸が多く、中央に柱穴状の掘り込みをもつ。用途は不明である。この時期の住居は本調査区では確認できなかつたが、50m北側の16次調査や200m南側の26次調査区で確認され、微高地に点在すると思われる。

弥生時代中期の遺構はI区で竪穴式住居1基（SC080）と土坑2基（SK003・SK042）を確認した。竪穴式住居は床面は削平されており、床下の掘方のみ確認した。II区では遺構は確認できなかつたが、後世の遺構から遺物が多く出土した。古代と近世の遺構により削平された可能性が高い。

#### 第2期 古代末（11世紀後半～12世紀）

28次調査では11世紀後半～12世紀の溝や井戸、土坑が出土した。SD086は東西方向の溝で長さ32.5m、幅2m、深さ80cmを測る。遺物は貿易陶磁の越州窯青磁碗や白磁碗IV・V類が多く出土した他、土師壺・皿も多く出土した。土師壺と皿の底部切り離しは壺がヘラ切りがやや多く、皿は糸切りが多い。区画溝の一部と考えられ、II区で南北どちらかに曲がる角が出土するのが期待されたが、II区中央部で立ち上がり、続きは確認できなかつた。遺物は主に南側から流れ込んでおり、南側に何らかの施設があつたと考えられるが、その後II区の西側で行われた32次調査で同時期の南北方向の溝（SD120）が確認され、溝で囲まれた範囲は北側にも広がることが判明した。

### 2. I区の調査（近世）

I区では近世以降と考えられる確実な遺構は溝がSD001と141、土坑はSK002と121の2基である。

#### 1) 溝

**SD001（第22図）** 現在溝の中央にはコンクリート製の水路があり、全体を掘り下げることができなかつた。土層（図版9-1）によると複数回の掘り直しがみられる。底面直上で近世～近代と思われる陶器片が数点出土したが、ほとんどが胴部片で時期が確定できる遺物はほとんどない。出土遺物についてはP49の遺構一覧表を参照して頂きたい。SD001からは近世以前の遺物が多く出土した（第23図001～006）。001は須恵質平瓦である。凸面が斜格子のタタキ、凹面は布压痕がのこる。古代末の遺構から多くの遺物が出土したが、瓦の出土は少なく全体で10点程度である。002・003は弥生時代

■は中世末～近世の遺構



第21図 12次・28次I区近世遺構分布図



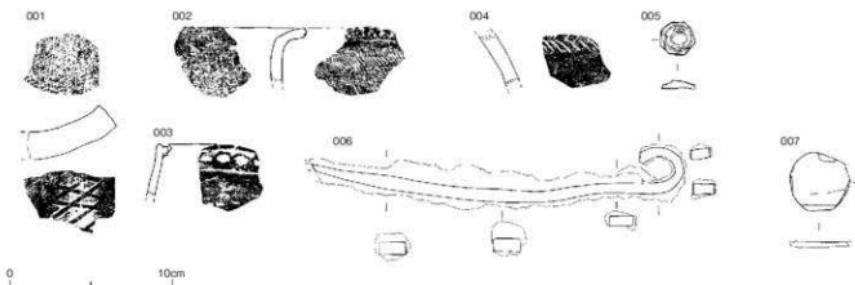
第22図 I区遺構配置図 (1/100)

前期の甕口縁、004は弥生時代前期の壺肩部である。005は素焼きのおはじきで八角形で径2cmを測る。上側の文様は型押しで下面は板状圧痕が残る。006は不明鉄製品である。現状で長さ23cmを測る。007はSK134との境界部分から出土した円形の粘板岩で径3.5cm、厚さ4mmを測る。紡錘車の未製品か。

**SD141（第22図）** I区の西辺中央に位置する。西端は調査区外に延びる。東端は近現代の搅乱である145に切られており、それから東では確認できなかった。調査区内での長さ2.3m、幅0.75m、深さ12cmを測る。埋土は焼土ブロックを含む。遺物は少ないが陶器鉢や炉壁片が出土した。

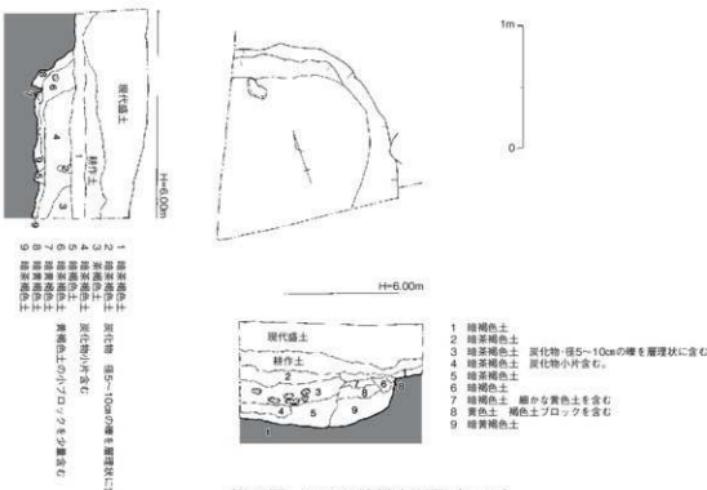
## 2) 土坑

**SK002（第24図）** I区の南西端に位置する。遺構の大半が調査区外に延びる。調査区内で南北



第23図 近世遺構出土遺物実測図（1/3）

## SK002



第24図 SK002遺構実測図（1/40）

1.5m、東西1.4、深さ43cmを測る。少なくとも2回の掘り直しがみられる。遺物は近世の陶器擂鉢や陶器壺が出土した。遺物の量としては弥生時代や古代末の土器片が多く出土している。

**SK121（第22図）** I区の西辺北寄りに位置する。西端が調査区外に延びる。調査区内では径110cm×96cm、深さ13cmを測る。埋土は灰茶褐色を呈し瓦、陶器片と共に焼粘土が出土した。近くのSD141では炉壁が出土しており、何らかの焼成を伴う工房等が存在した可能性がある。

### 3. II区の調査（近世）

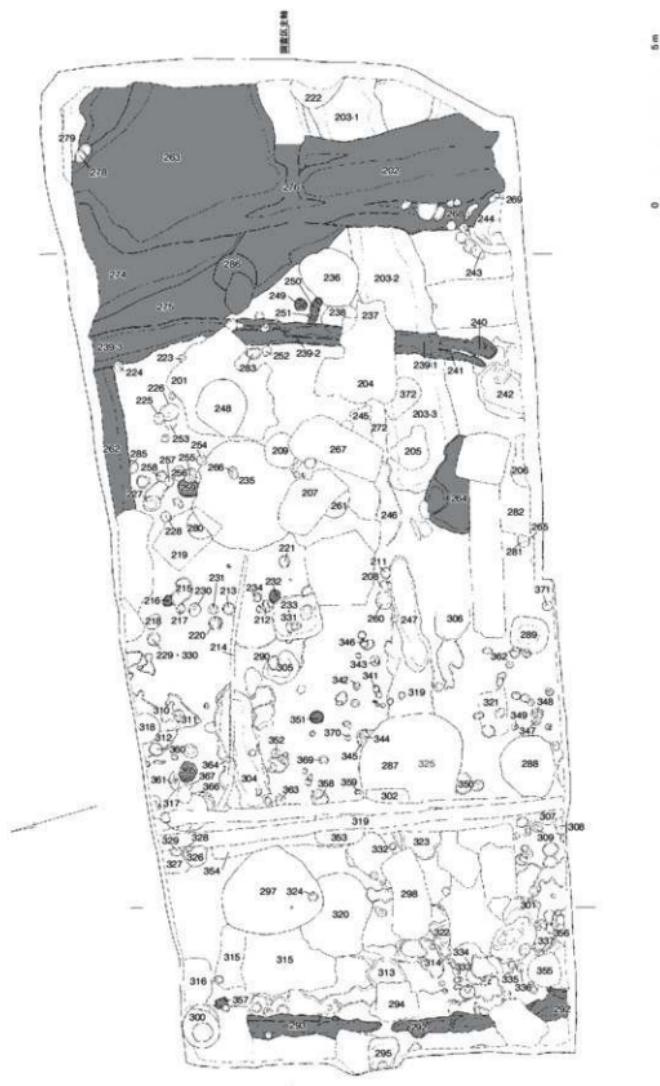
II区では溝5条（SD202・SD239・SD262・SD292・SD293）、池状遺構（SX263・274・275）、井戸（SE286）が出土した。

#### 1) 井戸（SE）

**SE286（第26図）** 調査区の東側で池状遺構の際に位置する。掘方平面は梢円形を呈し、主軸はN-73°-Eにとる。長径136cm、短径119cm、深さ146cmを測る。東側の壁面が大きく抉り込む。埋土から近世陶磁等が出土した。出土遺物（第26図008～025）。008は染付皿である。口径12.3cm、器高3.6cmを測る。胎土は白色で黒色微粒子が混じる。灰白色の地に紺の濃淡で染め付けている。009は磁器の一輪挿である。最大径9.6cmを測る。地は灰白色で障子と花は赤、葉は黒で縁取った緑色を呈す。010は白磁碗である。復元口径11cm、器高6.7cmを測る。わずかに青みを帯びた白色を呈す。011・012は陶器擂鉢である。011は復元口径30cm程で暗茶褐色、012は少し赤味を帯びた明褐色を呈す。013は陶器鉢で口径31.5cm、器高9.6cmを測る。胎土は淡灰色で外底部は露胎である。釉は外面が黄白緑色、内面は緑褐色と青緑白色の釉を半周づつかける。内底に5個の目跡が残る。014は陶器蓋で径9.8cm、器高2.6cmを測る。上側底面中央のつまみは指で軽くつまんで整形し2×13cmの梢円形を呈す。口縁端から上側には施釉し黄褐色を呈す。下側は露胎で淡黄褐色を呈す。015・016は陶器壺である。015は復元口径30.1cmを測る。胎土は淡灰褐色で白色砂を多く含む他に、少量の赤褐色と黒褐色の粒を含む。釉は外面と内面口縁は暗褐色、内面残りは明褐色を呈す。016は復元口径18.4cmを測る。胎土は赤みを帯びた暗灰色で細砂を少量含む。釉は暗褐色を呈す。全体に輪轂巻上痕が残る。017は陶器壺である。復元口径9cmを測る。胎土は僅かに赤みを帯びた灰黒色で器表面は暗赤褐色を呈す。灰緑と暗褐色の釉が斑状にかかる。018は陶器鉢で復元口径21cmを測る。胎土は淡灰褐色で白や赤褐色の粒を含む。釉は外面と内面の口縁下の角までが暗緑色で内面体部は灰緑色を呈す。019は陶製のトチンである。ややいびつな円形を呈し、径8.5cm、厚さ1.2cmを測る。暗灰～黄褐色を呈し、胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。窯道具関連の遺物はこの1点のみである。020は素焼きの皿で復元口径15cm、器高2.1cmを測る。胎土は精良だが焼成はやや弱い。淡褐色を呈し底部は内外面とも黒色を呈す。調整は全面回転ナデを施す。021～023は混入の弥生土器である。21は壺口縁で淡灰黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。022・023は壺底部で022は外面は赤味を帯びた淡褐色を呈す。内面は剥離のため不明。胎土に1mm程の白色砂を多く含む。023は底径8cmを測り、淡灰黄褐色を呈す。調整は内面はナデ、外表面は指サエ後ナデ、底部の凹みはヘラによるナデを施す。024・025は砥石である。024は安山岩ではほぼ完形に近いと思われる。長径25.2cm、短径20.9cm、厚さ6.2cmを測る。砥面は実測した面のみで側面と底面は使用していない。砥面中央は薄く剥離しているが、剥離の間には砥面が残る。溝状の切れ込みが数箇みられる。025は花崗岩で両端を欠く。現状で長径24.3cm、短径11.5cm、厚さ12.4cmを測る。上面と側面の上面に接する一部を砥面として使用している。

#### 2) 溝（SD）

**SD202（第27図）** 調査区の東端に位置する南北方向の溝で、主軸はN-7°-Eにとり、調査区内で



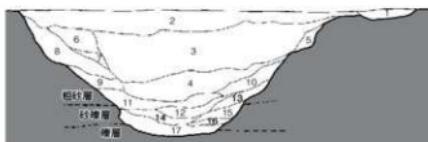
第25図 II区全体図 (1/150)



第26図 SE286遺構・遺物実測図 (1/40,1/4)

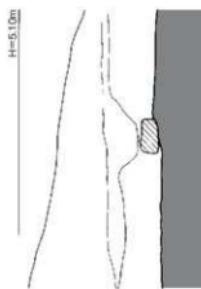
SD202

H=5.30m

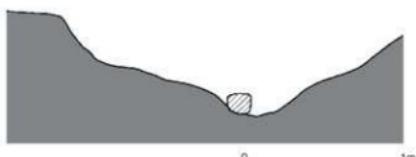


- 1 雜褐色砂質土
- 2 雜褐色土 2~3cmの小塊と3~4mmの粗粒を多く含む
- 3 雜褐色土 2層より細く塊が少ない
- 4 雜褐色土 黒色土と黃色土のブロックを少量含む
- 5 雜褐色砂質土
- 6 雜褐色砂質土
- 7 雜褐色砂質土 6層より明るい
- 8 雜褐色砂質土
- 9 雜褐色砂質土 小塊含む
- 10 雜褐色砂質土
- 11 雜灰褐色粘質土
- 12 雜灰褐色土
- 13 雜褐色土 1~2cmの小塊含む
- 14 雜灰褐色粘質土 植物質木の葉を多量に含む
- 15 雜褐色砂質土 小塊含む
- 16 雜褐色シルト
- 17 雜褐色砂質土 小塊含む

SX276



H=5.10m



第27図 SD202・SX276実測図 (1/40,1/30)

の長さ6.5m、幅27m、深さ103cmを測る。断面はV字形を呈す。埋土は第27図のとおりで、複数回の掘り直しが見られる。底に泥と落葉が溜まっていたことからなだらかな流れか、礫層からの湧水が溜まった状態であったと思われる。底面直上の14層と17層はやや粘質を帯び、7~10cm程の厚さであるが、そこから多量の木の葉が出土した。葉は常緑広葉樹でクスノキ科のヤブニッケイとタブノキである。溝の北側でSX263につながるが、境界部分（SX276）は高さ30cm程の壠状をなし、堰が途切れる中央部分には直方体の石がひとつ据えられていた（第27図下 図版12-6）。本来はSX263に流れる水量等を調節する施設が存在した可能性が考えられる。出土した遺物のうち近世に属するのは陶器擂鉢など少数で、多くは弥生時代や古代末~中世の遺物である。

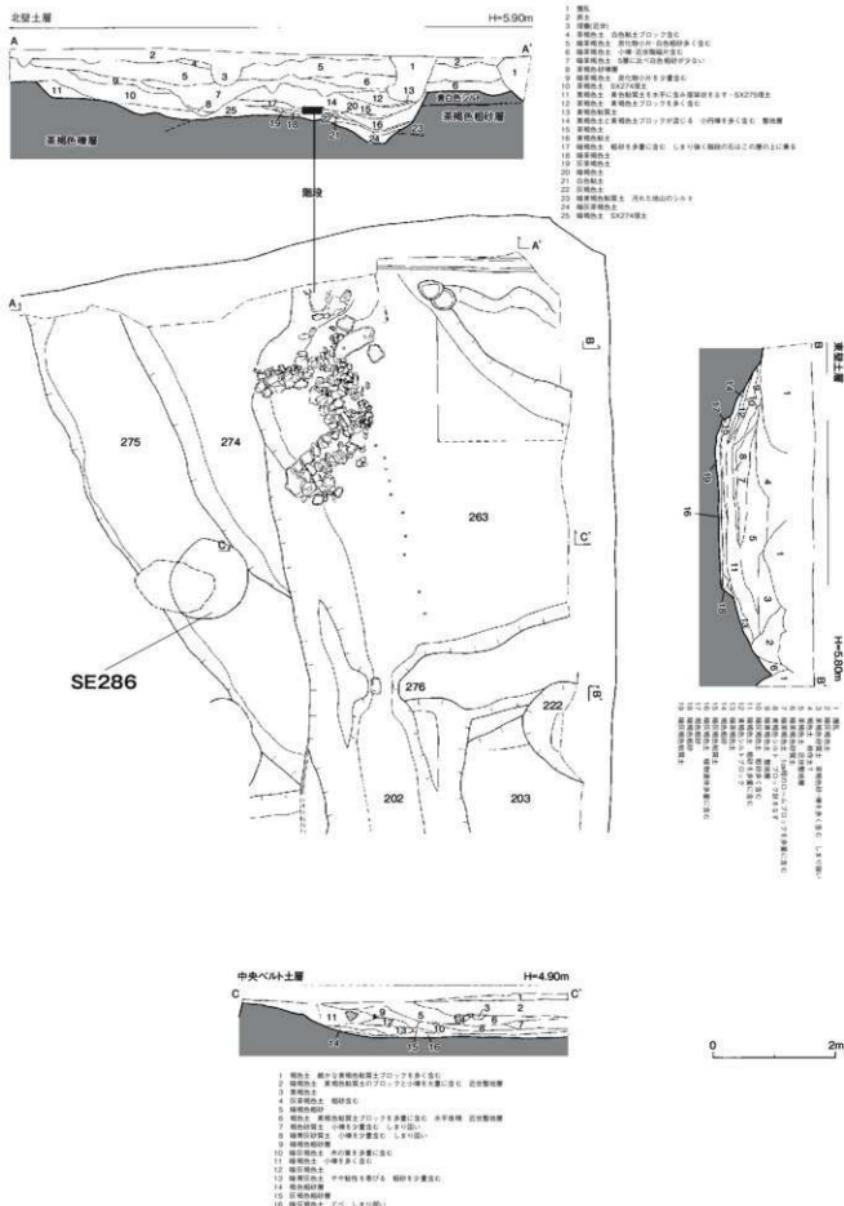
**SD239** SD202の西側に平行する南北方向の溝で緩やかな弧状を呈し、調査区南端で削平のため消滅する。調査区内での長さ12.2m、最大幅107cm、深さ10cmを測る。埋土は褐色~暗褐色を呈す。理土中から陶器壺や七輪の破片が出土した。

**SD292・293** 調査区西端に位置する南北方向の溝で主軸をN13°~18°-Eにとる。調査区内での長さ10m、最大幅107cm、深さ25cmを測り、埋土は灰褐色を呈す。遺物は陶器擂鉢や白磁碗、磁器碗等が出土した。

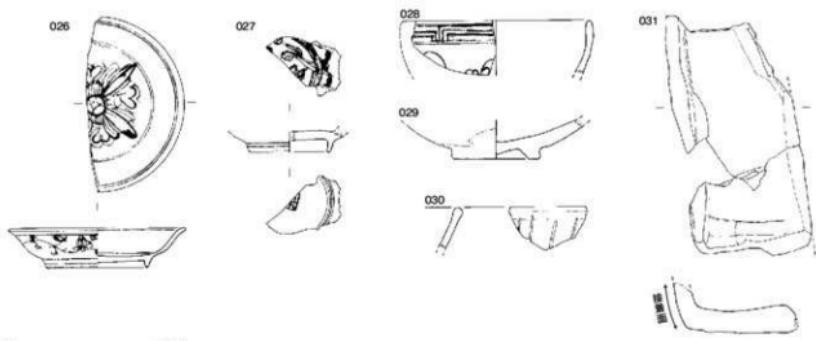
### 3) 池状遺構（SX）

**SX263（第28図）** 調査区北東隅に位置する。当初複数の遺構が切り合っていると判断し、263・270・271・273の遺構番号をとったが、最終的に一つの池状遺構の埋め立てによるものと判断し、まとめてSX263とする。南側はSD202との接合部から直角に東側に折れる。東辺は調査区外に延びるため不明であるが、I区までは延びないため調査区外に1~2m程延びて緩やかなカーブを描きながら調査区北端にぶつかる。西辺はSD202から統けて直線に延び、調査区北端間際で東に折れる。北辺は2m程で北側に折れて北側に溝状に続く。溝の幅は約1mを測り、SD202に比べてかなり狭い。池の規模は南北6m、東西は北端部で約35mを測り、南端の調査区外に延びる部分では6m前後になると推定される。深さは約70cmを測る。底面はSD202同様に礫層まで掘り下げ、ほぼ平坦をなす。東端土層の14層や18層、中央土層の9・14・15層は褐色粗砂層であるが流水による堆積ではなく地山の褐色粗砂層の崩落によるものである。SD202と同様に中央土層の10層（暗灰褐色土）や東壁土層の16層（暗灰褐色土）から多量の木の葉が出土した。樹種は同じヤブニッケイとタブノキである。中央土層の5・6層は黄白色粘質土ブロックを多く含み、2層は握り拳大の礫を多量に含む（図版10-7）。土は池状遺構を埋めた際の整地層で、多量の礫は地固めとして投げ込まれたものと考えられる。SX263が池とすると水の流出口である北東部に水門があった可能性が高いが、調査区内では確認できなかった。埋土から出土した遺物は少なく、時代の分かれる遺物は底面近くから出土した染付碗や皿、寛永通宝などである。中層から上層は東側の地山を削って投げ込んでおり、I区で検出した弥生時代や古代末の遺物を多く含む。出土遺物（第29図026~031）。026・027は染付皿である。026は復元口径10.8cm器高2.4cmを測る。027は淡青白色の上に緋の濃淡で描く。028は染付碗で復元口径11.6cmを測る。029は越州窯系青磁碗、030は龍泉窯系青磁碗で2点とも上層の埋土から出土した。031は土師質でナデを施す。L字型に立ち上がり図の左側は接合面である。用途不明である。

**SX274（第25図）** SX263の西北側に位置する深さ60cm程の掘り込みで底面は平坦をなす。第28図の北側土層では25・26層で7・8層の掘り込みのためSX263との関連は分かりにくい。だたSX263の石組み遺構に降りるための階段はこの層の上に乗っていることから、石組み遺構が作られたときに埋められたと思われる。埋土は暗褐色で白色砂と小円礫を多く含む。遺物は少なく、そのほとんどが古代末~中世の遺物であるが、陶器擂鉢片等近世の遺物が数点出土している。



第28図 SX263実測図 (1/80)



第29図 SX263出土遺物実測図（1/3）

**SX275（第25図）** SX274の西側に位置し、SD239、SX274に切られる。第28図北壁土層の11層にあたり、西辺は274に平行するが同一造構ではなく、274に切られている。埋土は263・274とは異なり、黒褐色を呈し黄色粘土を薄く水平な層状に数枚含んでおり、版築状をなす。遺物は古代末～中世前半の遺物しか出土していないが<sup>g</sup>、274との位置関係から274より若干古い時期と考えられる。

**石組み遺構A（第30図）** SX263の北西端に位置する。SX263の北西角を包む石組みである。南側はSX263の縁部分に長さ27cmの石を据え、それから北東側に長さ60cm、幅30cmの石列が伸びる。石列は整然と2列が平行しており、石は径10cm前後を測る。高さ一段分が遺存していた。北側はSX263の北西角を起点に西側に同じく幅25cm。60cm程の石列を組んでいる。南側と異なり整然とした列を成さない。南側と北側の石列は平行しないが<sup>g</sup>、南側はSX263の岸に直交して北側はSX263の北岸に沿ったためである。東側は南側石列に直交する形で幅30cm、長さ55cmの石列である。長さ10～15cmの角礫が3列並ぶ。東側の石列は中央の石列の上に重なるよう配置されている。東側石列の更に東側には栗石が長さ70cm、幅30cmの範囲で見られる。石は径5cm前後を測り、明確な列をなさない。

**石組み遺構B（第30図）** 南側石列の西側に接して石組み遺構Bが位置する。径10cm強の角礫を径40cmほどの袋状に組んでいる。第30図は石組みの南側半分が崩落したため欠損した状態である。

**石組み遺構C（第30図）** 石組み遺構Aの北側に位置する階段状の石組みである。調査区の北側から南側の石組みAに向かって降りていくための石列である。これらの石組み遺構は池状遺構の一角に設けられた水場である。これが洗い場的な実用的な施設なのかどうかは不明である。

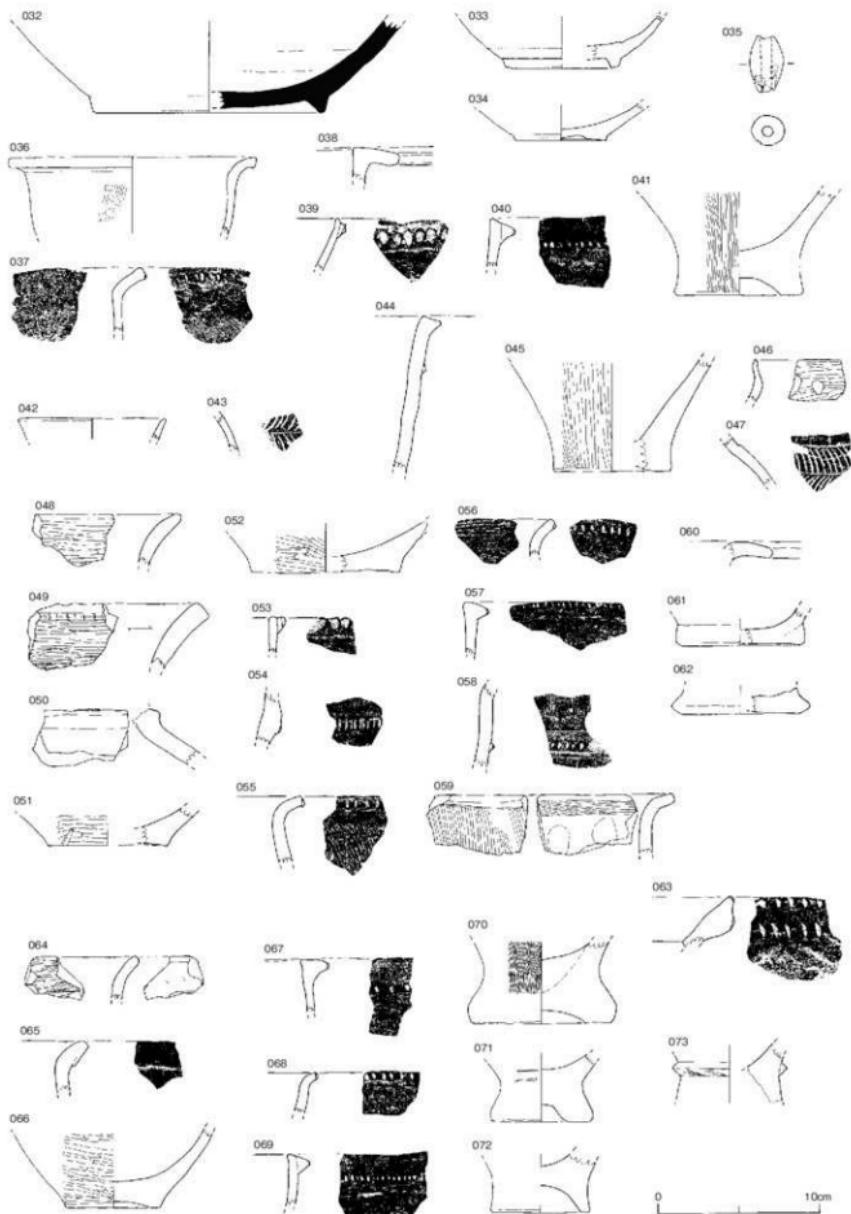
**木列** 石組み遺構Aの東端に沿うように幅10～15cmの間隔で木杭が12本出土した。木杭は径3～4cm程で、遺存長は約15cm程度である。下側を尖らせて疊層に打ち込んでいる（図版12-8）。木杭を北側から見るとSD202の溝の延長上に伸びる（図版12-7）。

#### 4. その他の出土遺物（第31・32図） 1199集に記載できなかった遺物を報告する。

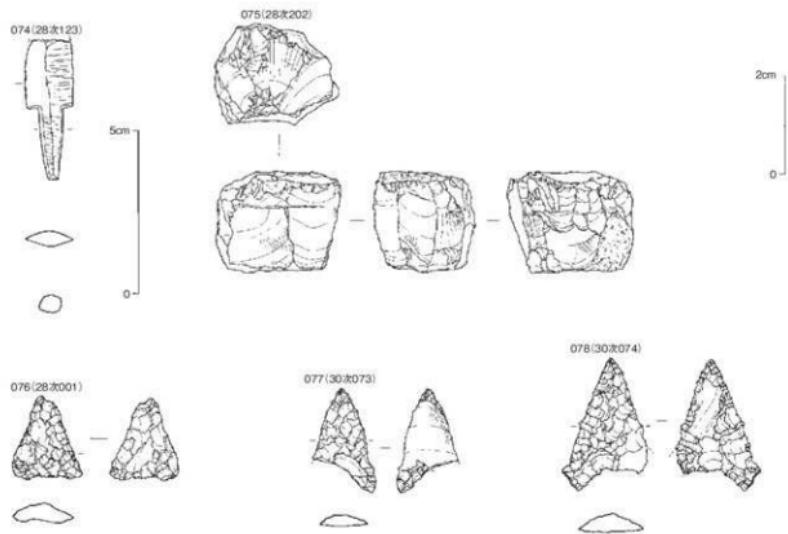
032は須恵器鉢で全体にナデを施す。淡灰色を呈す。033・034は越州窯系青磁碗である。035は土鍤で長さ3.4cm、径2cmを測る。036～041は弥生時代の壺である。042は古墳時代前期の小型丸底壺の口縁である。043は弥生時代前期の壺で肩部に有輪羽状文を施す。044～062は弥生時代前期壺及び壺片である。064は壺で内外面に煤が付着する。064～073はII区の黒ボク土掘り下げ中に出土した。064・065は丹塗りの壺口縁で研磨を施す。066は壺底部で外面は研磨、内面は摩滅のため不明である。070～072は壺底部である。073は高壺の坏部下端である。074は磨製石鎌で先端を欠く。残長4.2cm、



第30図 SX263石組み遺構実測図 (1/20)



第31図 その他出土遺物実測図 (1/3)



第32図 その他出土遺物実測図2 (2/3,1/1)

厚さ4.5mmを測る。075は黒曜石の石核で $2.5 \times 2.0 \times 2.0$ cmを測る。上下の面を平らにして図の左下の面から $2 \times 1.5$ cm程の剥片をとる。076～078は黒曜石製の石鎌である。076は長さ1.65cm、幅1.4cmを測る。077・078は片方の基部を欠く。077は長さ2.1cm、078は2.7cmを測る。

## 5. 結語

SD001は底面から近世～近代の陶磁器が出土しているが、担当者は溝の初現は中世末～近世初頭もしくはそれ以前（11世紀）まで遡ると考えている。理由は東側隣地で1988年（昭和63年）に行われた12次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告233集『原遺跡4』1990年）の結果によるもので、ここでは中世末～近世の東西方向の溝（SD01）の他、敷地を開むSD02・SD04・05・06・07・08・09・24・25などの区画溝があり、その溝に開まれた中に複数の掘立柱建物や土坑群、石組みの井戸（SE20・26・27）など多くの遺構が分布し、また18世紀にも溝（SD03）や集石土坑（SK12、SK13）等が出土したにもかかわらず28次I区でその時期の井戸や溝が出土しないのは12次調査区と28次調査区の間に何らかの境界が存在したためと考えられる。また、逆に28次調査I区で多く出土した古代末の溝や井戸などの遺構が12次調査で全く確認されていないことは両所の間の境界が古代末まで遡ることを想定させるものであり、それが当初は溝ではなかったにせよ、現在のSD001に沿ってなんらかの境界が存在した可能性は高いと考える。

池状遺構は埋没後上面に築かれた遺構から遡くとも近世末には埋められたと考えられる。その性格は不明であるが12次調査で確認された中世末～近世の屋敷に関連させ、屋敷内の作業場や庭園であった可能性を考えたい。ただ土壤中の種子分析では湿地に生える植物の種子は少なく、底には泥が溜まり、一面木の葉が堆積していた状況は観賞用とも作業場とも考えにくい。古代末の大量の貿易陶磁や風字硯等の遺物を廃棄した施設の性格や池状遺構の用途の解明は今後の周辺の調査に期待されるものである。

第2表 28次遺構一覽 1

第3表 28次遺構一覽2

※ [REDACTED] は近世遺構

第4表 28次遺構一覽 3

第5表 28次遺構一覽 4

※ [REDACTED] は近世遺構



1. SD001土層（北から）



2. SD001（北から）



3. SD001遺物出土状況



4. SK002（西から）



5. SK002土層（北から）



1. 三区全量（東から）



2. SE286（南から）



3. SD202（北から）



4. SD202土層（北から）



5. 263・274・275土層（南から）



6. 263・274・275土層（南西から）



7. SK263出土状況（北から）



8. SD202・SK263（北から）



1. SK263・274・275 (北から)



2. SK263・274・275発掘 (北から)



3. SK263中央ベルト土層 (南から)



4. SK263東壁土層 (西から)



5. SK263・274・275 (西から)



1. 202・263・274・275 (西から)



2. SK263石組み (西から)



3. SK263石組み (南から)



4. SK263石組み・木杭 (西から)



5. SK263石組み・木杭 (北から)



6. SK276 (南西から)



7. SK263木杭 (北から)



8. SK263木杭打込み状況 (東から)

## 報告書抄録

## 原遺跡19

—第32次・28次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1236集

2014（平成26）年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092) 711-4667

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市東区松田3-9-32

(092) 621-8711